



やらへども鬼

2

空蝉の心

みん兎

お姫様の黒い髪を梳かすの。長く艶のある真っ直ぐな黒髪を丁寧に梳る。それから、季節に合わせた色目の重ねの衣を一枚一枚、重ね合わせて、お化粧をして・・・。

床に広がる長い衣の裾は、花のよう。背に流れる黒髪は、滝のようで。優雅に仕上がったお姫様を見て、うんと頷く。ああ、でも何か足りない。・・・そう、そうよね。お雛様には、お内裏様。まあ、うちの姫様には、お内裏様というわけにもいかないから、どなたかすてきな公達が・・・。まとののは、櫛を動かしながら、思い浮かべていた。前髪を上げて間もないまだ、幼く見える、ふっくらした頬がニマツと笑みをつくる。うふっ。リアル、雛遊びだわと、呟きながら、丁寧に己の主の仕度を手伝っている。

主のゆりは、きゅっと眉を寄せた。

「ちょっと、まとの。何ぶつぶつ言ってるの。にやにや笑って、気持ち悪いよ？」

「えっと・・・独り言言っていましたか？」

うんうんと、ゆり。まとのの主人は、髪を梳かしていても、お化粧を施しても、前に置いてある鏡を覗いて、仕上がりをチェックしようとしめない。必要にかられて、今、大人しく姫君らしい仕度を整えているだけなのだ。これじゃ、何か足りないどころじゃないかと、一つ上の御年15になる主の姫君を見て、溜息をつく。

「あ～あ。ゆりさま、おひなさまみたいに、綺麗に仕上げても、ちっともうきうきしたりとか、なさらないんだもの。楽しみが・・・。」

「?何なの、雛遊び?・・・あなただって、もう、そんな年でもないでしょ。」

「いえ。そうじゃなくってえ。せっかく女らしくして下さったのに、もうちょっと、夢みたいなあとか。・・・あ、別に、ゆりさまに不満があるわけでは、ないんですよ。いつもの、水干姿もかっこいいし、素敵ですが。姫君に仕えてる楽しみというか、そういうの結構夢みて、お勤めを変えたもんですから・・・。」

まとののが、ゆりのもとに来た時は、まだ、女の童の格好をしていた。人に仕えるのは、はじめてかと思っていたが。

「そういえば、まののって父上が雇い入れたんだっけ・・・。」

普段、ゆりは母の家で暮らしている。ある日、屋敷にたった一人で紹介状を携えてえらくしっかりした女の童が、やって来た。ゆりの住む屋敷は、京でも治安の悪い右京にある。そこへ、年端もいかぬ女の子が一人やって来るとは・・・彼女は見も知らぬ場所で難にあうこともなく辿り着くことができたのだ。あたりを、平気であちこち駆け回っているゆりもびっくりの出来事だった。やって来た子・・・まとののは、なかなか物腰も雅で愛らしい女の子だった。姫らしくなく、男の子のようなゆりに、年の近い女の子を仕えさせて、少しは大人しくならないかという、ゆりの父の試みだったのだが・・・。

「最初に仕えていたのは、没落した宮家の姫君で・・・といっても、かなりなお年の方でしたから、お亡くなりになって、次が、受領の奥方様。ここは、はぶりがよくなって好い方だったんですけど、だんなさまについて任国に下られることになって、連れていけない使用人は人員整理

することになって、その時、その奥方さまのご親戚の姫様方に仕えることになったんですが、これがすっごい仕えにくい方たちで。辟易していたんです。」

そこへ、ちょうどゆりの父が、娘のそばに仕えさせる女の童を探していた。何だかわからないが、随分人を介して探しているようだったが、なかなか見つからないらしい。

「私は、もともと、そんな権門の家の姫に仕えられるような出じゃないから、駄目もとでと思って、前のお屋敷を訪れていらしていたゆりさまの父君に直接、売り込みにいったんです。なんだか、面白がられてしまって・・・紹介状を下さったんです。」

その時、頷きながら、「この子なら、やっていけるかもしれない・・・。」と呟いたゆりの父の言葉の意味は、まとのにはわからなかったが。

まとのが、にまっと笑う。まだ丸みの残る頬にえくぼが、浮かんだ。

「ちょっと思ったのと違う気はするけれど、ともかく、ゆりさまに仕えるのは楽しくって。これで、姫さまのまわりでもっと絵物語のような展開がくりひろげられたらなあ、っていう願望もあるんですけどね。」

ゆりの父の目論見は、はずれた。まとののは、すっかりお屋敷に馴染んで、ゆりとはある意味よい主従だ。彼女の雇われたお屋敷の姫、ゆりの父は今大納言だけれど、母は陰陽師をしている家の出だった。ゆりの母自身も、陰陽師をしていて、それゆえにゆりの父との関係は秘密だった。ゆりは、ただ身分の低い母をもつゆえに、普段は郊外でひっそりと生母と暮らしているということになっている。大納言から、とても鍾愛されているたった一人の姫君とだけ聞いていて、まとののは、そのお屋敷に来て、はじめて、女の童一人つけるのに苦慮していた理由を理解した。ゆりも、母と同じ資質を受け継いでいて、当時は見習い、今は、ほとんど一人前の陰陽師だった。当節姫としては、破天荒だけど、ゆりの人柄に惹かれて、まとのも、お勤め自体には満足している。

「物語・・・。今昔物語とか。」

これは、ゆりのお仕事柄、有り得る話である。まとのが、指折って数えるように。

「・・・うつぼ物語とか、伊勢物語とか、源氏物語とかです。」

なるほど、恋物語か・・・。別に恋をしたくないと思っているわけじゃないけれど。物語りのシュチュエーションが瞬時頭の中に浮かぶ。目を大きく見開くゆり。

「無理。」

同じようなまとのの丸い目と合って、互いにぱちぱちさせると、どちらからともなく笑い出す。

「うふふ・・・。ゆりさま、お友達のところでは、なるべく姫君らしくなさって下さいよお。ゆりさまのこと存じてらっしゃるとしても、向うは、ふつうのお屋敷ですからねえ。」

行ってらっしゃいまして、まとのに送り出されて、ゆりは、正親町にある友達の家へ出かけた。

季節は秋。紅一色の時期には、まだ少し間があるが、前栽の紅葉の上部は、早や赤く染まっている。緑から、上へ徐々に濃い紅へと変わっていく衣を重ねているような、葉の色のグラデーションが美しい。小さな葉の重なりの際間から、きらきらの、澄んだ光が差す。暖かい日で、庭の景色を眺められるように、几帳を廊下に仮に立てかけて目隠しをして、ゆり達はおしゃべりをしていた。

「ふふ……。それで、物語の女君のようにはなれないとお答えになったの？相変わらずねえ。やっぱり、陰陽師のお仕事は続けるのね。」

正親町(おおぎまち)の姫は、ゆりの素性を知る数少ない一人だ。鬼に攫われたところを、ゆりに助けてもらったことを感謝していて、姫も姫の母君も秘密はずっと守っていてくれる。そればかりか、時々こうして話をしたり、箏を弾じたり、花見だの何だの、時々邸にゆりを誘ってくれたりするようになった。

「そうね。辞める気はないわ。そんな私でもいいと言ってくれる人があるなら考えてみてもいいけれど……。まとのが言ったような公達となんて、事情を理解してもらえないと思うし、すべてを隠してなんて嫌じゃない？」

「……。真っ直ぐなゆり姫らしいわ。」

「うん。御簾の内深くに隠れて、ただ、趣深く、ゆかしい人柄のみを記憶している女君。つかのま触れ合っただけの恋なら、身元がわからなくてもいいのかもしれないけれど、それじゃ、私じゃないって感じだわ。そう思わない？直子(なおいこ)姫(ひめ)。」

ゆりの言葉を聞いた直子(なおいこ)は、開いた扇で上手に口元だけ隠して、くすくす笑う。

「そうねえ。私を助けてくれた水干姿の少年の、ゆりさまはとってもかっこよかったもの。完全に女姿(おんなすがた)ばっかりになってしまうのは、惜しい気はするけれど……。うふふ。あら、ごめんなさい。ちょっと、良い事思いついちゃったわ。いるじゃない。ゆりさまの素性をご存知の方。ほら。」

からかうような直子の顔。どきっ。一瞬思い浮かんだ顔は、直子(なおいこ)の知らない事情のほずで、思い直すと首をふるふると横に振るゆり。

「誰？まさか、兄上とかじゃ、ないよね。」

兄とは言っているが、血縁的には従兄妹の関係。けれど、父の養子で、幼い頃から兄として親しんでいるので、これは除外だ。

「あの、美形の陰陽師の……。薫風って名乗ってらしたかしら。」

「え～！あんな変人やだっ。」

薫風は、同業者でいわゆる悪人って奴じゃないけれど、ゆりには、ちょっと遠慮したい感じだ。

「そうよねえ……。やっぱり、一応官職についてらしても、あの方では、父君がお許しにならないかしらね……。」

「いや、その前に、そんな関係にはならないから、向うもきっとそう思ってるよ。」

「さあ。それはどうかしら。」

瞳を少し細めて、微笑んだ直子(なおいこ)の表情は、とても艶のある顔だ。ふうん、恋をしている女って、やっぱり綺麗になるのかしら・・・と、ゆりは思う。

そんなやり取りをしているところに、人がくる気配がした。

慌てて退がっていた直子(なおいこ)の侍女たちが、先に駆け込んで来て、几帳を設えなおす。

直子(なおいこ)には、すでに親に認められて、通っている人がいるので、その人が戻って来たのかと思い、ゆりは、暇を告げて帰ろうと思った。

「あら、駄目よ。ゆり姫。今出ては、姿が・・・。」

直子(なおいこ)の声に、侍女がゆりの姿を慌てて隠すのと、部屋に人が入って来るのと同じだった。

季節に合わせた紅(くれない)の葉を思わせる色合いの、直衣(のうし)を着た人が、おやと首を傾げる。

ゆりが、隣りを見ると、直子(なおいこ)も、几帳で姿を隠している。

ほんの少し首を傾げるゆり。

「祖母どのから、叔母上に届け物を頼まれてね。久しぶりだから、こちらにもうかがわせてもらった・・・というか、君の夫君から伝言を頼まれてね。」

やれやれ・・・といった顔で、座るなり言った。ばたばたしていたので、内と外を隔てる御簾も格子戸も除けられたままであり、当然のように外縁(そとべり)に落ち着くこともなく、中の廂まで来て陣取った。

「まあ。突然のお越しでしたけれど、中将さま？あちらで、止められませんでしたか。」

普通は、直接声を聞かせないのだろうが、そこは幼いころからの気安さで、直子(なおいこ)は、侍女の制止を無視してやって来た中将に、ちくりと一言言ってやる。傍のゆりの耳に、彼が母方の従兄妹なのだと教える。

「うん。何だか、慌ててたようだねえ。・・・いや、どなたかいらしていると知っていれば、頼まれたものを託けて、さっさとお暇したのだがね。」

うそおっしょいと、うろんな顔で見ている直子(なおいこ)の様子を知ってか、知らずか。

言いながら、懐紙と一緒に覗いている紅葉の枝を懐から、抜き取って、傍の侍女に渡す。侍女が、それを直子(なおいこ)に手渡した。

中将の視線が、几帳の奥を興味深そうにじっと見ている。

「ところで、紹介はしていただけないのかな？」

「え？ああ・・・。」

受け取った紅葉の枝に結びつけられていた文に気をとられていた直子(なおいこ)の気のない返事。

「気もそぞろだね。」

「あら、ごめんなさい。うれしくて、つい、お話を聞いてませんでしたわ。」

「・・・どなたかは、教えてくれないか。やれやれ、この庭の秋を楽しみつつ、しみじみ物語りしようと思ったのだが・・・。」

「あら、友達と、女同士のおしゃべりを楽しんでいましたのよ。どこのどなたであるのかは、申し上げるわけにはいきませんわ。中将さまは、油断がならない方ですもの。」

「ちょっとしたきっかけで、恋におちるのは、誰にも止められないものだよ。」

涼しい顔で、うけながす彼。

「親友と大事な従兄妹の恋を応援してあげたじゃないか。知恵をかしてあげたのは私だよ？少しは、考えてくれてもいいのじゃないかい。」

すると、この人が薫風の依頼主だったかと、几帳の影に隠れてじっと黙ったままのゆりが、そと外をうかがう。人騒がせな物の怪騒ぎは、こいつのせい。

直子(なおいこ)が、困ったようにひとつ、溜息をつく。

「そのことは、感謝してますわ。でも、それとこれとは別です。こちらの姫は、私にとって大事なお友達。いきなり泡のように湧いた適当な恋心に、傷ついては大変ですもの。それに、彼女のお父様に知れたら、こちらへ遊びにも来れなくなってしまうかもしれないもの。本気の恋ならともかく……。」

「それこそ、几帳の影の気配だけじゃ、無理じゃないか。……が、まあ、深追いはするまい。今日は退散するよ。」

中将は、あっさり追及をやめて、立ち上がった。

彼が去って行ったのを確かめてから、ゆりも暇を告げて出て行こうとした。

「待って。ゆり姫。まだ、その辺にいらっしゃるかもしれない。悪戯っけがあるというのか、悪人じゃないんだけど、そういうところがおありだから。侍女に見に行かせてみるわ。顔を見られるのは、嗜みのこともあるけれど、ゆり姫の仕事にも差し支えるでしょ？」

「う～ん。父の家の方で姿を見られることなんて、ないと思うから、大丈夫じゃないかな。」

「そう言われれば……大納言家で姫君に会うこともないかしら。」

「うん。せいぜい、右京の陰陽師の家の娘としか。普段は、そちらにしかいないし。」

「……そうかしら。……あっ。」

「？」

「忘れるところだったわ。そのお仕事、お続けになるのよね。」

「ええ。」

「じゃあ。ひとつ、うちからも依頼してもいいのかしら。」

「え？ここ、何もなさそうだけど……。」

ゆりが、きょろきょろと、辺りを見回す。

「違うの。親戚のお宅なのだけれど……。」

話の内容を聞いて、ゆりは頷く。

「それじゃ、早いほうがいいね。今夜うかがうと言っておいて。」

「え……。夜よ？」

「うん。男の子の格好して行くから。文月というものが来ると言っておいて。陰陽の博士の親戚だと言っておいてくれれば、向うも安心するんじゃない？」

「……………わかったわ。」

考えてみれば、助けられた時も夜だった。直子(なおいこ)は、思い直して、ゆりに「お願いね。」と言った。侍女が戻って来て、どうやら中將が素直に帰ったらしいことを確かめると、ゆりも見送られて帰って行く。

家へ帰ると、日の暮れるまで大人しく姫らしく、部屋の中で過ごし、夜になるとまとのに水干を用意してもらって、出かけることにする。

長い髪をふたつにわけて、両サイドで、ふたつ輪っかを作って結う。裾まで、まるめこまずに、房のように垂らして背に流す。髪を纏めていると。

ちょうど、紫野といわれる侍女が入ってきた。彼女は、こちらの家にいる時にゆりの世話をしてくれる女房だ。まとのと違って、いつも一緒というわけではないけれど、幼い時からずっとこちらにいるから、安心して接することの出来る一人だ。

ゆりは、父が帰宅しているのかどうかを確かめる。貴族の館というものは、大抵、いくつかの建物を外縁に繋がる廊下でつなげて、存在しているので、家族の気配は薄い。

「お戻りになっておられますが。ゆりさま、その格好……。」

「うん。ちょっと頼まれちゃって。ちゃんと、父上には断って行くから。」

「ご承知なさるでしょうか……。」

「う～ん。明日はもう、向こうの屋敷に帰っちゃうけれど……そうねえ。今日は、父上と過ごせなかったから、もう少し泊まってくとか、何とか言って、ご機嫌とるから。」

「……それは、喜ばれますわね。でも、こんな夜中に、危なくありません？」

「それを言ったら、仕事にならないわ。式神付だから、盗賊に出くわしても、大丈夫よ。」

「そのようなものですか……。」

「うん。」

以前に、内緒で抜け出して、大騒ぎになった。なので、一言断ってから行くことにする。

止められるかと思ったが、ゆりの父は渋い顔をしたものの、あっさりと送り出してくれた。警護を一人つけてだったが。

目的の場所についた。

「どこも似たようなものね。」

門の前で、中を覗きながら、ゆりが言った。

「そうですねあ。姫……いや、若君のお家は、大きい邸宅の内に入りますが。規模はちがっても、基本は四角い敷地ですから。」

「平太の故郷なんかは、違うの？」

「ははは……。山に囲まれているのは同じですが、京のように人が沢山集まって住んでいるわけではありませんから……。田や畑のほうが多い。牛車なぞ、行きかうこともないから、こんなふうには、東西に道を固めて、まっすぐに整備する必要もない。」

その結果、京には四角く区切られた空間がいっぱいある。

「そっか。洛外の風景みたいなんだね。」

「いやいや。もっと、鄙びてますって。」

「ふうん。・・・あのね、平太。若君っていうの、やめてくれる。とりあえず、文月って、言っ
といて。それと、一介の陰陽師だから、中までは連れてけないからね。」

「わかってますって。文月さまの仕事には、わしは役に立てませんし、門のところで待ってます
から。」

「ごめんねえ。夜は冷えるのに。父上ったら、心配性で、警護なんか、いらないうって言った
のに。」

「いえいえ。用心にこしたことは、ありませんから。それに、文月さまと一緒にだと、なかなか出
会えぬ出来事にも、出くわしますから、そこそこ、おもしろうございますし。」

ゆりは、平太の腰に佩いた刀を見た。飾り太刀なんかでない、朱鞘の刀は、実用的なものだ。
平太が、肝の据わった侍であることを思う。

「じゃあ。行ってきます。」

ゆりは、門のところで中に案内を乞う。向こうも待っていたらしく、待たされることもなく、
中へ通された。

廊下を巡っているときに、庭先に、懐かしい人物に出会う。

「あれ？」

雨水(うすい)だ。雨水(うすい)と、もう一人いる。直子(なおいこ)のところで会った中将だ。その
中将が、雨水(うすい)とゆりの顔を見比べて、首を傾げる。

「知り合いかな？雨水(うすい)どの。」

「はい。お世話になった家の・・・。」

「・・・では、あなたの事情は、ご存知か。」

雨水(うすい)がこくりと、頷く。ゆりが、廊下から、下を不思議そうに見ている。雨水(うすい)
が、こちらを見て、にっこり笑う。

中将が、ゆりに先にここにいる理由を訊ねた。相談を持ちかけられた親戚どうしが、互いに気
を利かせて、ダブルブッキングというところか・・・。

「いくら、陰陽博士の親類でも、まだ、童ではないか。ここは、やはり雨水(うすい)ど
のに・・・。」

じろじろ遠慮なく見ている。つぶやく中将を他所に、ゆりは廊下の先をちょっと走って行って
、庭に降りる階の一番下まで降りていく。雨水(うすい)に、こっちこっちと手招きした。

雨水(うすい)もやってくる。懐かしげに、目を細めてゆりを見ている。ゆりが首を傾げた。階の
一番下だけど、彼よりは上の位置に立っているはずなのに。目線が、変わらない。

「もしかして、背伸びた？」

「ええ。もう、ゆ・・・えっと。」

雨水(うすい)の視線がちらりと、中将を見た。彼は、無視されたことに気を悪くすることもなく
、ゆっくりとこちらにやって来る。「文月だよ。」と、小声で、ゆりが囁く。

「文月どの・・・には、久しぶりだね。相変わらず、お元気そうで。」

雨水(うすい)は、記憶を失くして、ゆりの家にしばらくいたことがある。実は、院の皇子なの

だが、いろいろあって、父君のもとに戻られたあと、身分を隠して、陰陽師をやっている。宮さまとして、出仕していないから、顔も世間に知られていなく、帝より特別の配慮をもらって、普段は陰陽寮の片隅で、働くごく官位の低い官人。表向きは、もう一人の恩人先輩陰陽師の薫風の従兄弟ということになっている。

「久しぶりじゃないよ！一年近く、顔も見せないで、もう。家出てってから、一回きりじゃない。」

「すいません。もう少し、一人前になってから・・・と思ってたので、実は、先日、お邪魔したのですが、会わせてもらえなくて。」

「えっ？母上が？」

「いえ。父君のお屋敷だったので・・・。」

雨水(うすい)は、平太のところには何度か来ていた。以前に、彼に簡単に腕をねじ伏せられた経験から、身を守る術を習いに来ていたのだ。刀も弓も、随分本格的に鍛えているのだという。ゆりは、目を丸くした。

「ええ～。何で、もう強くなる必要もないじゃない。」

「いつぞや、あなたを守れなかったのが、悔しかったですからね。」

まるで、あなたを守るのは自分の役目だと言われているみたいな、瞳。

「え、と、あの・・・。」

もう、家で雑色やってた頃と違うのだし、それに、自分には式神がいるから、大丈夫だよと思ひ、口にしようとして、ふと、横合いから、強い視線を感じる。中将だ。

「まるで、姫君にでもかける言葉のようだ。父君が会わせないというのも、奇妙なことだ。」

「それ、質問なのですか？えっと、と、特殊な家だから、ほら、色々事情があったりするのよ・・・。」

「陰陽師の家だから、潔斎でもしていたか・・・。」

ゆりは、あはは・・・と、笑ってごまかす。嘘は言ってないもんねと、心中で舌を出す。それにしても、この中将という人は、直子(なおいこ)姫のところで見たとときと、印象が違う。あの時は、かなり軽薄な印象を受けた。

「中将さまでしたっけ？」

「ああ。」

「どうして、雨水(うすい)の事情を知ってるって訊いたの？」

「素性を存じ上げている。砕けた物言いをしているが、これは、ばれないように。得心いったか？」

「うん。」

彼が、蔵人の頭を兼ねる中将と聞いて、びっくり。蔵人は、帝の秘書官たちで、その束ねの頭は二人で、側近中の側近だ。「げっ。こいつ、エリートじゃん。」と、心の中でゆり。ここが、最終地点の者もいるにはいるが、大抵は、何年か勤めたら、参議、つまり閣僚の仲間入りだ。他のコースから、出世する者と違って、まったく実務の出来ぬものとか、気働きのない者は、めったに叙されることのない、官職だ。まず、頭の中將と聞けば、切れ者が多い。もちろん、該当者

がいなくて、不作の時期もあるだろうが……。不作？ゆりは、はじめの印象を思い浮かべる。

雨水(うすい)のことは、やはりある程度、事情を知っている人間がいないと、ということで、帝の側近である彼には、知らされていた。

説明を聞いて、ゆりがこくこくと頷く。

「それじゃあ。ここは、雨水(うすい)どのに任せて、子どもは帰れと言いたいところだが、仲が良
いようだし、彼の仕事が終わるまで大人しく待っているか？」

「え、でも、私もくれぐれもと頼まれたのだし、何もしないなんて……。」

「では、あとで事の次第を報告しておけばいい。」

中将の言葉を、雨水(うすい)がやんわりと遮った。

「文月どのなら、安心です。こちらは、中将どのの親戚を訪れるついでということで、今、ここ
にいる。私のほうは事前に連絡してあったわけではないでしょう？」

「……。では、文月どのに任すか。しかし、同席させてもらうぞ。」

中将は、ゆりのほうを見ている。ゆりが頷く。

中将たちが、家人に断って、階を上がってきた。問題の建物の方へと向かう。

廂のところで、今か今かと、でっぴりと腹の突き出た中年の男がうろうろしている。そばに、
家司たちが控えているから、その男がこの家の主だ。

彼が青ざめているのが遠くから見えたので、ゆりは少し足を速める。廊下が、足の下で、ぎし
ぎしとなる。廂に近付くと、この家(や)の主が、家の怪を、まくし立てる。

「もう、まったく、せっかく桜の美しい名庭を譲り受けたと喜んでいましたのに。がたがたと、
毎夜のように揺れて、もう、恐ろしくて恐ろしくて……。早く何とかしてくれ。」

急かされるように、ゆりが一步室内に足を踏み入れる。ぎっ。床板が擦れる音は、暗い室内に
不気味に響く。ゆりは、首を捻る。あれっ？疑問に思って、そこを指さし、振り向く。

「あの。なんで、厨子棚が壁に寄ってないのですか？」

訊きながら、横目に映った雨水(うすい)は、上を見ている。天上の梁を？心の中で、確認しつつ
、家の主の答えを訊く。

「だからあ、なんぼ寄せても、あのおおりの、動きますねん。揺れるもんだから、危なくて、灯
火は、まったく灯せしませんし、まったく……。」

ぶつぶつと、ぐちのような訴えがさらに続く。きょろきょろと辺りを見回したあと、床に頬を
こすりつけるようにして、耳を当てる。起き上がって、座ったまま人指し指を頬にあて、ふんと
、考え込む。そのまま、廂の方に出て、座って、上を見たり、下を見たり、ぐるりと視線をめぐ
らして、考えている。雨水(うすい)は、一回、階を降りて、庭へ出て、また、戻って来た。戻って
来た彼と、目が合う。

ちょうど、中将と家の主の会話が耳に飛び込んで来た。

「こんな童で大丈夫なんやろか。」

「大丈夫と、お墨付きですよ。私の連れてきた雨水(うすい)どのと、顔見知りらしいから。」

「う～ん。怪異さえ、おさまったら何でもええ。何人も、術師を呼んだのに、ち～っとも、おさ
まらへん。どないなっとるのんや……。」

「それは、その辺の辻にいる陰陽師を適当に選ぶから・・・。」

あきれた声の中将のつつこみに、ゆりが振り向く。

「そんなに、お呼びになったんですか・・・。」

「もお、三人も呼んでおる。」

ゆりの質問に、がくりと頭を垂れる、家の主。

となりにやって来た雨水(うすい)と、目を見交わす。二人、こくりと頷くと。

「お気の毒に。」

うっかり、ゆりは笑ってしまわないように苦労した。親指と人差し指を広げて、前に突き出す。ぴっ。袂がゆれる。両の手で、合わせて四角の箱をつくって、それを室内の方にむけて翳すようにしている。

「ねえ、雨水(うすい)どの。建物のようす、確認できた？」

「ええ、目で見てわかるほど・・・。」

雨水(うすい)も、手で四角をつくる。それを傾けた。ゆりがうんうんと、難しい顔して頷く。

中將の不審げな顔と、ぶつかって、ゆりは、口を開く。

「あの。怪異のせいじゃないです。建物が歪んでいるんですよ。この建物、いつから建っているものですか？古いからと。それに、さっき、床に顔を近づけたとき、泥のような、水のような匂いがかすかにしたんです。地盤を、もう一度、確認したほうがいいでしょう。」

京は、もともと湿地帯だったところを人の手で整備して、人が住めるようになった。今も地下には、水を湛えている。ゆりの住む右京などは、造営当初の京とは違い、整地しても水はけが悪く、住むには向かなくなって、朽ち果てたお屋敷や、完全に野っ原に戻ってしまったところ、住める場所にちょこちょと庶民の小家や、下級官吏が住んでいるようなところだ。この家のような上級貴族たちが住む左京は、比較的乾いているが、それでも知らない間に、水が染み出て来るなど、有り得るのだ。

「え？じゃあ、あの三人の陰陽師が調伏できなかったといって、帰って行った怪異は。」

そりゃ、そうだ。退治しようがないもん。ゆりは、心の中で言った。

これだけ、ぎいぎいなる床板。目で見てわかるほど、傾いているのに、最初、がたりと家が揺れたときに、隣家も、敷地内に建つほかの建物も揺れず、よほどびっくりしたのだろう。怪異の仕業と、思い込んでしまった。

「ごさいません。ここ、場所的には、きれいな気が満ちているところですよ。念のため。」

懐をごそごそ。算木を取り出し、何度か打ち合わせる。全く、何にもなし。きれいなものだ。ゆりは、重ねて、怪異を否定した。

見ていた中將が、雨水(うすい)を伺う。彼が軽く首を縦に振ったのを確認して、家の主を慰める。

「そんなあ。奴ら、見料だけは受け取って行きおった。これだから、坊主と陰陽師なんて、怪しい輩なんだ。」

ぶつぶつと、つぶやく主。

「・・・お気の毒・・・です。」

と、ゆり。それでも、気をとりなおした主は、早々に必要な手配を控えている家司に指示する。
「いや。文月どの。ありがとう。雨水(うすい)どのも。また、今度、何かあったら、よろしく頼む。」

「いいえ。それより、いきなり倒壊ということはないかとは思いますが、出来れば、ここを離れていたほうが良いかと思えます。危険のないように、過ごしてくださいね。」

ゆりはそう言った。ゆり達は、見送られて門を出る。

待っていた平太と、雨水(うすい)が立ち話している。

中将が、興味深そうに、ゆりを見ている。

「ふ〜ん。君は、あんなにはっきりと否定してよかったのか？陰陽師や、修験者のたぐいは、もっともったいぶった返事が返って来るものではないのかと、思っていた。」

「結果を曲げて言うことなんて、出来ません。あの陰陽博士だって、違うなら否とおっしゃるはずですよ。もちろん、伝え方は違うかもしれませんが、あ、でも、前の三人は、いんちきかもしれませんが。」

「しかし、あの家の主も、途中でいい加減気がつかんものか。」

腕を組み、彼の眉根を寄せているその様子が、面白かったので、ゆりがくすっ。紅葉葉(もみじば)を思わせるような重ねの直衣。風流な姿が似合う外見に似合わず、ひょうきんな仕草。

「思い込みって、そんなものですよ。思い込みが引き起こしていた怪もあるのです。そんなときは、否と言って、魔法を解いてあげるの。」

じっと、こっちを見ている中将に、首を傾げたゆり。

「君、お姉さんいないか？どっかで、見た気がするんだが・・・。」

「いませんけど？」

「いや、気のせいだよな・・・。」

中将は、腑に落ちないと言った顔をしている。もしかして、桔梗御前、ゆりの母とどこかですれ違ったのかもしれないと、ゆりは思った。彼女の母も、同じ仕事をしている。それならば、どこかで見かけていたとしても不思議ではない。

「いや。気に入った文月とやら。これから、雨水(うすい)どのとこの近くの我が家で、秋の月を愛でながら、一献やろうと思っていた。そなたも、ついて来ると良い。雨水(うすい)どのとも、久しぶりだろう？ゆっくり、話が出来るぞ。」

「え。あの。家に帰らないと、父上が・・・。」

「何言ってるんだ。年頃の男の子が、一晩ぐらい、家を空けるくらいあることさ。ああ、でもまだ、童形をしているが・・・。ずいぶん、ゆっくりしているんだな。」

元服のことを言っているのだ。15歳ぐらいまでに、髪を肩ぐらいまで短くして、髻を結って、烏帽子を被るようになる。これで、成人した証になるのだ。これは、貴族だけでなく、庶民だってかわらない。いつまでも、童形のままなのは、牛飼いくらいのものだ。

中将の目から見た、ゆりは、ずいぶんその成人の儀式を引き伸ばしているようにみえたのだろう。当世、なるべく早くという傾向があるので、雨水(うすい)のように、事情があったならともかく、15というのは結構、すれすれのラインだ。

「あ、えっと、それじゃ、あつかましく、お邪魔させてもらっちゃいます。」

中将のそれ以上の追及を避けるため、ゆりは思わず叫んでいた。その声で、雨水(うすい)と、平太がぎょっとした顔。

移動の途中の「ひっ、姫さま、さすがにそれは、拙いかと思います〜。」と、平太の諫め。「こ

れ以上詮索されたら、まずいじゃない。大丈夫。男の子だと思われてるから。」と言うゆりの囁きに、くるりと雨水(うすい)に顔を向けて、「雨水(うすい)どの。頼みますぞ。」「私も、反対ですが。」

「じゃ、いまさらどう断るの？それに、雨水(うすい)もいるし、ね？」「……………」と、ひそひそ話が続く。怪しまれるので、結局、雨水(うすい)も平太も反対できぬまま、中将の邸宅に来てしまった。

で、月を見ている……………。

さすがに、夏場ではないので、池に突き出た釣り殿でというわけにはいかないが、南表の庭に面した内側の廂に座って、酒を傾けている。簾が巻き上げられ、空がよく見える。二枚格子の上部を上げて、そこから、見上げる月もなかなか好いものだ。格子の模様の向こうに見える月。その月明かりで床に、外の廊下の欄干や、柱、格子の形に描かれた濃い黒い影。庭では、撒かれた白砂が、その淡い光をうけて、時折、きらっと光る。趣味良く手入れの行き届いた庭。

陶器の平たい小さな皿のような、杯に、酒を注ぐ。ゆりは、自分の杯に満たされた酒を興味深々で見ている。ぺろっ。ちょっと舐めて見る。

「甘い……………」

くっと、飲み干す。喉を通るとき、一瞬熱さを感じたが、すぐに治まる。酔っぱらってしまうかと、思ったが、なんともない。

「おいしい…………かも。酔わないけれど……………」

「一杯くらいで、酔っぱらう奴がいるか。まあ、下戸ではないということだな。あまり急いでいっぺんに飲むなよ。どうなるか、わからないんだから。」

中将は、しつこく酒を勧める人ではないらしい。年少の者に対しての、配慮を見せた。

雨水(うすい)が静かに立って、階の方に寄った。

虫の音が草むらから聞こえる。それに耳を傾けて。

「霜草は、蒼蒼として、虫、切切。…………月明かりが美しい夜ですね。蕎麦の花のかわりに、白椿の落花が、照らされてますよ。」

「ふん。生憎、ここは鄙びた村落ではないが、家人たちも寝入って静かだしな。」

中将が、応じる。雨水(うすい)が思い浮かべているのは、白楽天の、「村夜」という題の漢詩だ。白楽天は、この時代の教養人に好まれた詩なので、中将には、趣きがすぐに伝わった。

ゆりが、立ち上がって、雨水(うすい)の傍に行き、月に照らし出される庭を見る。

「うん、月明かり綺麗だね。でも、どっちかって言うと、雪のようなのは、この白砂の方じゃない？」

と、答える。階のすぐ近くに座っている雨水(うすい)が、すぐ傍に立つゆりの顔を見上げる。眩しげに、ちょっと目を眇める。一瞬、手を延ばそうとして、引っ込める。にっこりと、頷く雨水(うすい)。中将が頷きながら、自分の杯に口をつけるのが目に入る。

「秋の虫の音も、切々…………。哀しげな響きもまた格別。」

と、呟き、詩を吟じる。

霜草は、蒼蒼として、虫、切切。

村南、村北、行人絶ゆ。

独り門前を出でて、野田を望めば、

月明らかにして、蕎麦(きょうばく)、花、雪の如し。

鄙びた村落の少し寂しさの漂うなか、見つけた美を詠った詩を、中將が口ずさむ。なかなか、趣深く、詠う。

空になった彼の杯に、雨水(うすい)が酒を注いだ。

それから、話題は色んな詩の話に及んだ。吟じながら、杯が空になると酒をついで……。なんのことはない、宴会でカラオケ……のようなものだ。雨水(うすい)はどちらかというところゆっくり杯をすすめている。ゆりは、さすがに、こういうのは始めてなので、あまり沢山は飲まず、おしゃべりに徹している。杯がすすみ、上機嫌で、詩を吟じていた中將に、まだ、杯を飲み干さない前に、雨水(うすい)が酒を注ぐ。

「いやいや……まだ、杯が……。」

と言いながら、やっぱり飲む。どうも、かなり酒がまわって何だか、わからなくなっているらしい。空にしてしまい、雨水(うすい)が、また、注ぐと、中將は、くっとそれを飲み干す。それが、止めの一杯だったらしい。バタツとその辺に寝っ転がると、寝てしまった。

ふう。やれやれと、雨水(うすい)が思っていると、ゆりがじっとこちらを見ている。

「なんか、最後のほうは意図的に注いでなかった？」

「ええ。」

露骨に機嫌が悪そうな顔している。

「???怒ってる？」

ゆりは、ちょっと、首を傾る。あれ？こんな感じだっけ。少なくとも、いつもにこにこ穏やかな顔している雨水(うすい)しか知らない。それも、どちらかというところ、自発的な意思を感じない印象だった。

「そうですね。文月どの、が、酒の席に同席など、私は反対でしたよ？」

「ええ。結構、趣があっていいなと思ったんだけど、なんで～。ぴったりの漢詩やら、面白かったけどなあ。」

「中將の興をひくように、これでも考えたんだから。のってくれてよかったよ。」

「え？ああ、もしかして、私への詮索を封じるためなの？」

「それも、あるけど……。」

ゆりの方に手をのばしかけて、ひっこめる雨水(うすい)。それには、まったく気付かず。

「お酒、おいしかったし。家にいたら、こんなことはまずないし、あ、でも、今度、父上とも一杯やろうかしら。」

と、のんきなゆり。

「それは、・・・父君が嘆かれるな。ますます、私は、会わせてもらえなくなりそうだ。それに・・・」

ああ、もう、と、面倒くさくなり、雨水(うすい)は、ひっこめた腕を伸ばし、ゆりを引き寄せる。さすがのゆりも、固まった。

「たとえ、風流人でも、男同士で飲み会なんて、酔いがまわったら、女の子には聞かせられないような話もとびだすから・・・。ひやひやした。もう、次はなし、駄目ですよ。ゆり姫。」

「・・・姫かあ。」

とたんに、元気を失くしたゆり。雨水(うすい)は、彼女を引き寄せていた腕を放す。ゆりは、そのまま、階近くの欄干(てすり)に腰掛、柱に寄りかかって座る。

「はあ。もう、やっぱり、この格好、限界かなあ。」

みずらの片方から、垂れている髪(かみ)の房(ぼう)を手にとる。中將(ちゆうしやう)に指摘(しゆさつ)されたとおりに、いつまでも、童子(どうし)の格好(かくこう)が出来(でき)るわけではなく、かといって、長い髪(かみ)を立て烏帽子(かぶと)に無理(無理)やり押し込んで、男姿(おとこざし)も何(なに)だかなあと、ゆりは呟(つぶや)く。

「まあ、別に、母上(ははじょう)だって男装(ぶさう)してやってるわけじゃないし、続けられないわけでもないか・・・。」

「姫(ひめ)といわれるのは、嫌(いや)なのですか・・・？」

「う～ん。そういうわけでも、ないみたい。まとのが、喜び(よろこ)ぶそうだけど、それなりに綺麗な重ね(かさね)には心が動(動)くもの。それが、動き(動き)にくいということもあるけど・・・何(なに)だか、振舞(まわ)いを考え(かんが)えなきゃいけなかつたり・・・。」

「違う人(ひと)になってしまったように感じる？」

「・・・うん。」

雨水(うすい)が、今度はそっと手をのばし、ゆりの手を袖(そで)に包(か)んだ。

「あの酷(こ)い雨上(あめあ)がりの日(ひ)、手を差し伸(の)べてくれたゆり姫(ゆりひめ)の、あの眼差(めざ)しは、どんな格好(かくこう)してたって、変わらない。上(あ)辺(へ)からは、どんな人(ひと)だって、心(こゝろ)の中(なか)までわ(わ)からないもの。でも、振舞(まわ)いを改(か)めたって、何(なに)となく人(ひと)となりは伝(つ)わるものだよ。きっと、ゆり姫(ゆりひめ)は、ゆり姫(ゆりひめ)のまま(ま)だ。」

「そうだね。ありがとう。雨水(うすい)どの。」

ふわっと、手が離(はな)れる。雨水(うすい)は、欄干(らんかん)近く(ちかく)の柱(はしら)に、背(せ)をもたせ掛(か)けて、ゆりを見上(みあ)げる。月明(つきあ)かりに照(て)らされたその姿(すがた)を見上(みあ)げ、まぶしげに目(め)を眇(めが)める。

「ね。家(い)にいた時(とき)と、印象(いんげん)が違(ちが)うよ。」

「さまが違(ちが)ったから、でもない・・・？」

ゆりの家(い)にいた時(とき)は、元服(げんぷく)前(ま)だった。

「雨(あめ)の日(ひ)拾(ひろ)ったときは、感情(かんじ)がなんていうか、起伏(きふ)が少(すく)ないっていうか。いつも、にこにこ機嫌(きげん)よかつたけど・・・あ、でも、ないか。私(わたし)を庇(かば)ってくれたりとか、あの事件(じけん)の時(とき)とか、自発(じはつ)的(てき)に行動(こうどう)してたっけ。・・・うん。」

「そうですね。何(なに)もかも諦(あきら)めていたから。今の私(わたし)は、変(か)ですか？」

何(なに)も望(のぞ)んではいけ(い)ないのだと、思(おも)い込(こ)んで(い)た。すべ(すべ)ての感情(かんじ)を押し殺(ころ)しているうち(うち)に、それ

に慣れて気付かぬ自分になっていた。

確かに、人が生きていくうえで、諦めなくてはならないこととか、折り合いをつけていくこととかは、沢山あるけれど・・・。

「ううん。いいんじゃない？今までと違ってみえても、きっと、それも雨水(うすい)なんだよ。」
にっこり、笑ってみせる。変わらず、ゆりの笑顔は鮮やかだ。あの時から、止まっていた世界が動き出した。雨水(うすい)も、微笑み返す。

雨水(うすい)には、ほしいものがある。その為に、努力をする。たとえ、それが叶わなくても、何もしないよりは、ましな生き方なんだと、思うようになった。

「ありがとう。私もあなたを守りたいのだと、覚えていて下さい。ゆり姫。」

そう言った雨水(うすい)の言葉は、おそらくゆりには届いていない。しばらく、お互いの消息を話していたあと、ゆりが眠ってしまった。欄干に腰掛けたまま、大きなあくびをひとつすると、こくりこくりと船を漕ぎはじめ、危ないので、起こしたのだが気付かない。立ち上がった雨水(うすい)は、ゆりを抱えて、風邪をひかないように、室に運ぶ。室のすみにある几帳を持ってきて、気持ちだけでも、中将と自分たちとは隔てをおいて、寝かせた。

「・・・これでは、ますます、会わせてもらえなくなりそうだ。」

会わせてもらえなかったのは、おそらく、大納言から、牽制されているのだ。彼にとっては、大事な娘だから、それも、当然かもしれない。それでも、いつか・・・言葉が浮かび、雨水(うすい)は、その気持ちに驚く。ひとりでの、口の端に笑みがにじむ。まあ、こんな自分でもいいかと。見上げた月の光は、白く美しく輝いている。

そのまま、格子のそばによって、独り月をみながら、起きていた。

小さな川の水面に立つ、さざめきのような声が、聞こえる。御簾から、後宮の女房たちの出だした袖や裾の色とりどりの衣。頭中将は、ゆったりとその廊下を歩く。彼が通るにつれて女房たちのひそやかに交わすおしゃべりが一旦止まり、通り過ぎてしまうと、ひそかにため息がもれ、静かになってしまうのは、頭中将にとっては、日常の光景になっていた。女たちに騒がれたとしても、どうということもないのだ。この出だした袖の前に座し、気の利いた会話を交わし、去り際そっと袖を引き、思わせぶりの言葉を囁くだけで、今夜の相手は簡単に決まる。駆けだしの頃なら、それも楽しみのひとつだが、今は、さすがに、引く袖も選ぶ。ここにいるのは、後宮の後に仕える女房たちだ。彼女たちの気持ち次第では、女主人の後やその父である大臣、ひいては主上の耳に、うっかり心象を悪くしかねない話を吹き込まれることも考えなくてはならない。だから、相手になる女の人柄も考慮している。もちろん、彼女たちのご機嫌は取らなくてはならないから、時々立ち止まって、会話で楽しませることも忘れはしないが、この日は、早くに退出する為、仕事を終わらせるべく、急いでいた。

角を曲がった所で、格子のむこうに人の気配がした。

ふわりと、良い香りが漂い。くすりと、笑う声がある。

「おや。右衛門の君ですか……。何か、楽しいことでもありましたか？」

彼にとっては、よく知った人。打ち解けて、話はするが、深い仲ではない。友達止まりの親しい関係の女房に、立ち止まって話しかける。格子戸の上部は開いているので、扇を翳した女房装束姿は、彼の位置からは見えていた。

めずらしく取り澄ました感じで。

「ええ、こちらで庭を眺めていましたの。秋の気配を愉しみつつ、たまには、遠出もしてみたいなあなどと考えていたら、あちらから、ため息が聞こえて来ましたの。まるで、波のさざめきのようにこちらへ向かって……。くすくす……。」

途中で、耐えられなくなって、笑い出してしまった。

「あ〜おかし……。普段は、偉そうな顔してる藤壺の方たちが……。あなたに、声をかけて貰えなくてがっかりしてるわ。おかげで、少し胸のすく思いがしました。」

上を向いて、ふふんという感じ。どうみても、たしなみある女房には見えないが、彼女が主思いの女であることを知っている中将は、さすがに咎める気にもならず、苦笑をもらすのみだ。彼女の仕えるのは、入内してすぐに、父親に死なれ、後ろ盾の弱い女御なので、風当たりがきつくないよう、女房たちもひっそりと後宮で暮らしている。女主の繁栄は彼女たちにも及ぶ。大人しくしていても、立場の弱い彼女たちが嫌な思いをさせられることもあるはずで、直接、妃である他の女御などから、言われるのならいいが、同じ女房からいやみを言われたりするのは、勝気な右衛門にとっては、かちんとくる出来事ではあるらしい。とは言っても、彼女も誰かと争うようなことは、主の為に避けている。

「こんなことで留飲をさげるなんて、情けないこと。」と、ため息をついて、笑いを止めたが。……。なるほど、気晴らしをしていたということか……。中将は、頷く。

中将は、格子戸の向こうへ顔を覗かせ、軽口をたたく。

「あいかわらず、はっきりと言うね。なら、もっと彼女達に悔しい思いをさせてみるかい？こちらに見えている袖を引こうか。」

「ちょっと、冗談でもそんなこと言うの、止めてください。もし人に聞かれたら、風当たりがきつくなってしまいますわ。そうでなくとも、梅壺の者たちは、皆大人しく過ごしておりますのに。波風立てないでくださいね。・・それに、私、あわよくば偉い方の愛人の座を獲得なんて考えの持ち主ではありませんもの。」

「妻のいない私に、愛人の座？」

「私たちのように、人に仕える身で、正式な妻に数えられるのは難しいのではないですか。どのみち、家柄の良い姫君に媚入りなさるのでしょ？だから、ですわ。中には、恋愛を楽しむ人もいるけれど、若い女房たちの中には、宮仕えもそこそこに、玉の輿を狙って、楽に暮らしたいって夢を見る娘も多いのよ。中将さまなんか、格好の的。お気を付けあそばせ。」

「・・・そこまでは考えたことがなかったな・・・。しかし、花が多くて、どの花を手折るか、決めかねているので、右衛門の忠告も意味をなさないと思うが。」

「あら、あちらの方、こちらの方と噂を聞いたのは、私の空耳だったのかしら？でしたら、余計なことだったですわね。ね？どんな方が中将さまの目にとまるのやら・・・。ただ一人と思いつめることは、これまで一度もないのでは？」

「やれやれ、右衛門の君には、いったいどんな男に見られているんだか。・・噂かあ。」

「そうそう、女たちのおしゃべりでは、誰と誰が過ごしていたとか・・そういう話題は、すぐ耳に入って来るものですもの。」

「怖いな右衛門の君は。しっかりもののお局さまに、身の潔白を信じて頂くには、今夜あたり参上つかまつるしかないかな。・・・っと、今日、明日と、駄目だったな。物忌みで、休みだ。残念。」

「？」

「方角が悪いので、知り合いの家へ泊まりなのだよ。でも、内緒で出てこようか？」

中将の言葉を本気にはしていないので、右衛門の君も、適当な断り文句を並べる。

「軽い方ね。そうね。残念ながら、私も、物忌みですわ。誰にも会いません。そのあとは、今度は、女御さまがお里に行かれるので、そちらへお伴しますから、中将さまとは、すれ違いですわね。・・ほほ。案外、方違え先で、運命の出会いなんてあるかもしれませんわね。そうしたら、少しはお変りになるのかしらね。」

翳した扇がずれて、子供のいたずらを思いついたような彼女の瞳が覗く。

女子供は、物語のような話が好きだよな・・・と思い、中将は、肩を竦める。

「物忌みでひとり寂しく籠る私は、しんみりと秋の月を眺めているだろう。詩句のひとつも口ずさみ、傍らに、右衛門のような情趣を解するいい女がないのは、残念だが、ま、それも、仕方あるまい・・・。」

そう言って、中将は立ち去ったのだが、右衛門の冗談が我が身に起ころうとしているとは、彼も、その時は、思いもしなかった。

第一章 七

庭に霜が降りた寒い朝・・・。

ぼやっと、白く煙った朝靄が徐々に晴れていく。朝日が、露に濡れた葉っぱに当たってきらりと輝く。さすがに、この時間になると、家の物の怪たちもなりを潜める。

「ふう。寒さむっ。」

運ばれて来た炭櫃に、こすこすっと手をあわせて、温める。しばらく、温まるまでそうしていた。ゆりは今、起き抜けで、髪も垂らしたまま、袿を肩からひっかけたままの姿だ。まとののは、さすがにもう身支度を整えて、つの盥に米のとぎ汁を張ったのを持って、室に入ってきた。それで、顔を洗って、髪を梳り、装束を着せてもらい、お仕度を整える。普通の姫君ならばそうなのだが、ゆりは、着替えばかりは自分でやる。母とゆりの住むこの屋敷は、人手が少なく、厨から朝餉を運んできたりも、まとのがやることになってしまうので、時間短縮のために出来ることはやることにしていた。

今日も、顔を洗って、櫛をまとのが持ってきて、いつものようにみずらに結うために、髪に櫛をいれていたところだった。

庭先に人影がさした。

え？と、思って、顔をあげる。こんな時間には、誰も訪ねてくるはずがない。家人たちだって、さすがに朝の仕度の最中とわかっているこんな時間には、ここを通らないはずだ。

まとのが、櫛を動かしていた手をとめて、慌てて、近くの几帳を取りに行くのと、声がかかるのと、ほとんど同時だ。

「文月君か・・・？」

「中将・・・さま？」

何でこんな時間にやってくるの。取次ぎもなしに・・・あ、取次ぎいないか、と、ゆり。

「ゆりさまっ。」

ぎゃああと、叫び声をあげながら、物凄い勢いで、まとのが几帳でゆりの姿を隠した。

姿が隠れて、一瞬の沈黙。さすがに、気付かれたかと思い、気まずい空気がながれ、ゆりは、様子をうかがう。沈黙をやぶったのは。

「なんて無作法なまねを、どなたか存じませんが、こんな時間に突然庭先から現われるなんて、ちょっと、失礼じゃありません？」

まとのが仁王立ちになって、外の人物をにらみつけている。動じることもなく、しばらく考えていたあと、中将が口を開く。

「こちらに、雨水(うすい)どのがいると訊いてきたのだが・・・。」

まとのが、後ろを振り向き、ゆりがちょっと几帳の間から、顔を覗かせて、互いに顔を見あわせる。

「予定は、ありますが、こんな時間にいらっしゃるはずないじゃないですか。」

まとのが、心底不快そうに言う。

「いや。なかなかきつい娘だ。姫君に仕える侍女としてはいい女房だ。」

「……………」

今にも、しっしと追い払わんばかりのまとのに、そう声をかける。

「昨日、雨水(うすい)どのが文月君のところへ来ると言っていたから、やって来たのだが。私は、方違え先からだったので、早く着いたようだ。すまなかった。」

あっさり、頭を下げられ、困惑の表情で、ゆりを振り返るまとの。うんと、首をたてに振ったゆり。

「なるほど、女の子だったとは。そりゃあ、警護の侍がいるはずだ。あの夜、雨水(うすい)殿と彼が、反対していた理由も、納得だな。」

後ろの、ひそひそ話を、ちゃんと聞いていたのか。ゆりは、苦笑する。

「雨水(うすい)殿に用って、方違え先で、何か、あったのですか？」

「いや、その、なんていうか……。居所を占って欲しい……。ことがあって……。」

珍しく語尾が尻つぼみだ。ゆりが、それならと、まとのに。

「まとの。ここはいいから、母上呼んできて。」

「それは、いいですけど、まさか、お二人にするわけには行きませんよ。」

「ああ。そっちは大丈夫。真白。」

ゆりが呼ぶと、行き成り、廊下にうさぎが現われる。二本足で立って、餅を頬張っている。中将が、固まる。うさぎは、手に残っている餅を齧り、一度、びよ〜んと餅を引き伸ばしてから、ごくんと一口で食べてしまった。

「無用心すぎるぞ、主。」

にまっと、中将へ、極悪な笑みを向けて、ゆりに叱られる。

「真白。食事中、悪いけど、そちらの方をお客さまを通す部屋に案内して。」

「ああっ。また、つまみぐいしてる。」

と、まとのは言っあと、真白の姿を見て固まっている、そのお客様にせきばらいをして。

「この、式神が、ご案内しますからね。以後、御用のあるときは、そちらへ回って下さい。こちらへは、立ち入り禁止ですよ。よもや、夜中に忍びこもうなんて、考えないでくださいね。怖い目にあいますよ。なにせ、この家は特殊なおうちですからね？」

くぎをさすまとのに、ゆりのつつこみが入る。

「ちょっと、まとの。やめてよ。それでなくても、化け物屋敷って言われてんだから。そりゃ、事実かもしれないけどさ。広めるようなこと言わないで。」

「いいえ。ゆりさま。こういう方にはしっかり、くぎをさしておかないと。あんまり、無用心がすぎますよ。何かあってからじゃ、駄目なんです。今日から、お屋敷をうろうろしてる役に立たない物の怪たちにも、よっく言っておきますからね。お世話になってる姫さまに恩をかえすようにって。」

と、腰に手をあてている。まとのは、まだ幼さの残るふっくらした頬をふくらませ、一人前の女房のような口をきいている。ぷすっ。中将が、ふきだしながら。

「いや。私だって、人の恋路を邪魔立てするようなまねは……。その。私は、どちらかというとしとやかな姫が好みだから。安心しろ。文月君は、面白い子だから、そのままのつきあいで。」

そういうと、こわごわ、二本足で立つうさぎを促し、その場を立ち去る。ゆりも、慌てて身支度を整えた。

一目見て、忘れられない人に昨夜巡り会ったと彼は、言った。「誰も、私を見てくれないの。」と言って、従容とあきらめたような横顔が、儚げで、思わず言葉を重ねていた。きっと、彼女が笑ったら、美しいに違いないと。花が開いたような笑顔になったその人を、うっかり名も住むところも、聞くのを忘れてしまったのだと。どういうわけか、方違えで、泊まった家の人ではないらしい。まったく、行方を捜そうにも、手がかりがない。彼女を探す手がかりが欲しい、というのが依頼の内容だった。

桔梗が占った結果は、無。意味を図りかねたが、どうも、依頼主の話から、もしかすると妖しの者と係わりがあるかもしれないと、その夢の人を、遠ざけるように、忠告して、符を持たせて、帰すことになった。中将は、かなり、ショックを受けていたようで、青ざめて、符を受け取り帰って行った。

珍客が帰ったあとの、室内は、くすくす笑い声が響いていた。

「本当、あの人が帰ったあとでよかったわ。くすくす。そんな、場面に鉢合わせたら、絶対、職権乱用で、あの中将どの、あとあとかわいそうなことに。くすくす……。」

愉快そうに、笑うゆりの母。ゆりに似た顔立ちの、ただし、もっと迫力のある双眸をしていて、いかにも艶のある花といった感じだ。

すでに、後からやって来た雨水(うすい)も、いて、困惑の表情で話を聞いている。

「笑いごとではないです。お方さま。」

という雨水(うすい)の小さな抗議に、ゆりの母、桔梗が、おやという表情をした。

「まあ。雨水(うすい)どのは心配してくれているのですね。うちの娘も、年のわりには幼いでものね……。」

桔梗は、となりに座っているゆりの頭を、ぽむぽむと撫でる。

「母上っ。そんな小さい子みたいに。」

ゆりの抗議を、じっと桔梗の瞳が見ている。

「今回のことも、始めから、女の子だと、わかっていれば、あの中将どのも、振舞いを考えて下さったのではないかしら……。」

「それ、この格好を改めなさいってこと？」

「そうねえ。あなたには、式神もついているし、普通に考えなくてもいいのかもしれないけど、そのうち、その格好も似合わなくなってくるわ……。その時考えてみれば、いいのかもしれないわね。今は、まだ、納得していないようだから。」

「・・・・・・・・・・。」

「でも、覚えておいて。それなりに、振舞うってこと、窮屈に考えすぎないで。女の子である、あなたを守ってくれることもあるってこと。ちゃんと、自分を大切にすることを考えなくては、ね？」

ゆりがうんと頷くと、桔梗の目許が笑う。

「まあ、でも、中将どのと、陰陽師のゆりが顔見知りだってことはともかく、今朝のできごとは、あの人には内緒ね。雨水(うすい)どのも、いいかしら？」

「・・・はい。」

首を捻る雨水(うすい)に、桔梗が心底、楽しそうに、ゆりの外泊以来の大納言のようすを教えてくれた。あのあと、たっぷりお説教をされたゆりは、しばらく、向うの家から、帰ってこれなかった。そればかりか、習字の稽古といって、古今集の写しをやらされ、管弦に、裁縫、たっぷりとお作法の宿題を出され、缶詰状態だった。あまりのお姫様生活に、音を上げたゆりが、「母上がお独りでかわいそうだから・・・。」と、父に泣きをいれた。

母の名が出たので、大納言もようやく、その状態に、終止符をうつ気になったらしい。帰って来たのはいいけれど、大納言がこちらへ三日に開けず、顔を出す。目が届かないと駄目だと、思っているのか・・・。

「えっ。それじゃあ、私も、ここに来てはいけないんじゃ・・・。」

雨水(うすい)の強張った顔に。

「いいのよ。それは、義理を欠かさず訪ねて下さったのに、追い返すなんて。あの人には、ちゃんと取り成しておきましたからね。」

と、桔梗。それまで、口をはさまなかったまとのが、声をあげる。

「そうですよう。そんなことになったら、私のリアルお雛様遊びが・・・もとい。雨水(うすい)さまは、ゆりさまの同業者のお友達。危険のあるお仕事ですし、もしかしたら、助けて下さる方も、しれませんもの。」

何？リアルお雛様。まだ、そんなことを言っているのかと、ゆりの眉が寄った。

「・・・・・・・・・・。」

まとのの勢いに、雨水(うすい)が引いている。桔梗が、くすっとまた、笑う。

「リアルお雛様。あら、それなら、あの中将さまでもいいのではなくて？まとの。頭の中将さまって言ったら、若手の出世頭よ。」

「何が何でも、公達ってわけじゃないです、お方様。あの方、なんだか、自分ペースで。ゆりさまが、お幸せになれないじゃ、意味ないですう。それに、大納言さまも、何だか、あの男はやめておけて、言ってらしたし。」

桔梗が、首を横にふる。

「あの人は、誰であっても駄目なの。跡取りの姫として、婿とりを・・・なんて言ってるけれど、あの人の考えている条件を満たす方なんて、きっとこの世には存在しないわよ。本当は、娘がかわいすぎて、手放すつもりなんかないの。」

ぷっと、思い出し笑いをする。そばにいるゆりに。

「私は、娘のことを大事にしてくれる人と一緒になればいいと思ってる。幸せだと、思えることは人それぞれ、違うのだから、よく考えてね。迷ったら、大人の知恵も、ちゃんとそばにあるのだということを思い出して。あの人だって、ゆりが真剣な態度を見せたら、考えるわよ。親だもの、子どもの幸せを考えるのあたりまえでしょ？・・・これも、まだ、先の話ね。」

「うん。」

ゆりの返事。

「そう、じゃあっと、遅くなってしまったけれど、雨水(うすい)どのの話をきかせてね。あれから、父上さまや、母上さまは、どうなさっているの？」

桔梗が、話題を変え、ここを出てからの雨水(うすい)の話を聞きながら、楽しい一時を過ごしていると、またまた、人が訪ねてきた。

まとのにだ。勤め先を変えて、ずっと行方知れずになっていた彼女を、親戚の者が、尋ねあて、やって来たのだった。

まとのの、父方の大伯父という人が、危篤ということで、急に宿下がりすることになった。今まで、帰る家がないとっていった彼女の事情を、心配して、桔梗が、少ない家人の中から、一人供をつけて、田舎へ送り出す。

そうしたら、供について行った者が、慌ててすぐ戻って来た。まとのの、滞在している家で、怪異が起こっているという。

雨水(うすい)は、待っていた。ゆりの父、大納言が帰路かならず、通るはずの場所で、彼の乗る牛車が現われるのを、待つ。

退出の時間や、今日通る道筋なんかは、彼の供の侍、平太に確かめてみたから、あってるはずだ。ほどなく、見覚えのある牛飼い童の追う牛の繋がれた牛車に出会うことが出来た。平太が、付いていたので、彼と目があうと、牛車が止まる。車がとまったので、大納言も気づき、御簾をのけて、顔を覗かせる。

雨水(うすい)が、会釈した。

「どうされた？話があるなら、邸を訪ねて下されば、よいのに。乗っていかれますか？」

「いえ。今は、一陰陽師でございますから、同乗させていただくわけにも、行きませんから。急いでおります。道端で、呼び止めて申し訳ありません。」

「……ふむ。」

「ゆり姫が、侍女のまとのの里へ行くといっているのです。何でも、怪異で、難儀しているとか。おそらく、止めることは出来ないと思い、お方様に、私も供としてついていくことを承知していただきました。」

「重大なことになっておるのか？」

「いえ、行ってみなければわかりませんが、京の内ではございません。道々のことも、ありますし、私の持っている笛は、姫の式神の力の欠片。これが、欠ければ、どのくらいの力が発揮できるのか、実際わかりません。」

「うむ。桔梗が承知したか……。わしのところには、あとで事後承諾と思われなかったのか？」

「考えました。もし、強く止められたらとも思い……。でも、やはり、一言断っておこうと……。」

「わかった。娘のこと、頼みます。」

「はい。」

と、話していると、ちょうどそこに通りがかった人がいる。

「中将どの？」

雨水(うすい)が、あっけにとられた顔で、中将の顔を見た。大納言も、じっと、彼を見ている。目をしばたいた。

「中将。内裏で見かけたとき、訊こうかと思ったのだが、どこか体の具合を悪くしているのではないか。蔵人の役目は、楽ではなからう。」

「大納言さま。いえ、これは、別に、どうということもないのです。言ってみれば、気の病のようなもので……。雨水(うすい)どの。」

げっそり頬のやせた中将が雨水(うすい)の方をみる。

「桔梗御前にもらった符が、効かないのですか？」

「いや。その……会いたくて……。」

「まさか、剥がしたんじゃないでしょうね？」

雨水(うすい)が、強い口調で訊ねる。彼は、夢に見た美しい人に会いたいと言って、居所を占ってくれと、数日前、ゆりの屋敷にやって来た。ゆりの母が、占ったのだが、結果は、無と出た。それでも、夢とも思えぬような、存在感があったと主張する彼に、妖の類かもしれないから、符を必ず、寝る前に休む部屋に貼っておくようにと、桔梗から言われた。

こくっと、頭をたれ。

「剥がした。」

「どうしてっ。」

「・・・剥がしたが、ちっとも現われない。やっぱり、幻だったのかもしれない。もう一度、会いたい。」

なんだ恋わずらいかと、雨水(うすい)と大納言が顔を見合わせる。

「気持ちはお察ししますが、とりあえず、身の危険は、脱したのなら、今のところはよしということで、私は、先を急いでいますから。」

「先？」

「ええ。ゆり姫のお供で、彼女の侍女が里から、戻ってこないの、心配して見に行くというので・・・。宇治より向こうになりますから、さすがに一人では行かせられない。」

「それなら、私もついて行こうかな。もう、何だか、元気が出なくて・・・。宇治なら、別邸があるから、途中の宿を提供できるよ。ああ、心配しなくても、邪魔はしないから。」

「ええっ。」

「ゆりどのに、さすがに野宿はさせられないだろ？」

「・・・・・・・・。」

ごほん、ごほん、大納言のせきばらいが入る。

「あ～、それなら、家の別邸を使うといい。中将は、家でゆっくり休んだほうがいいのではないか？」

「いえ。ご心配には及びません。ちょっと気晴らしをしたら、もどに戻りますから。」

「・・・・・・・・。」

大納言が一瞬目をむく。その表情が見えないように、雨水(うすい)がさっと体の位置をずらす。中将は、気付いていない。ここで時間を食っていたら、ゆりが先を急いで、出発してしまうかもしれないと思い、そこから、動くことを決意した。

「すいません、大納言さま。また、お話は、のちほど。失礼いたします。」

「う・・・む。」

雨水(うすい)は、そそくさとそこを立ち去る。

右京の家につくと、先に預けてあった馬に乗り、ゆりを乗せて、宇治の方角へ急ぐ。途中で、馬を取りに帰っていた中将が追いかけてきた。

大きなおまけに、ゆりが大きく目を見張る。

「頭の中將って、家にもなかなか帰れない、忙しいお役目じゃなかったですか？」

「物忌みとか、多少は都合出来るさ。」

「多少ねえ・・・。」

「まあ、そんな邪魔にするものではないぞ。京の貴族の箔は、田舎へ行けば、役にたつ。少なくとも、道々、野宿は免れる。」

「いいですけど、危険だと思ったら、すぐその場を離れていただくように言いますから、それだけは、聞いて下さいね。」

「わかっているとも。」

追い返すのも、面倒くさくなって、そのまま、道中をともにする。

目の前に、田園風景が広がっている。京の内にだって、空いたスペースに畑を見かけることもあるし、ちょっと郊外に出れば、田んぼが広がる光景は、目にすることが出来る。

別に、田や畑が珍しいって、わけでもないけれど、目に映る山並みも、すでに収穫を終えて、藁の積み上げられた田に、夕日が当たって金色の景色が美しい。「わあ・・・。」日の沈む前の一瞬の感動。ゆりは、頬をほころばせる。

雨水(うすい)も、同じ思いであるらしく、馬をとめた。隣りで、中將も、景色に魅入っている。「いつまでも見ていたいものだが、夕景色というのは、ほんの一瞬だな。」

「そうですね。つい足をとめてしまった。・・・先を、急がねばならないのに。」

「その目的の家は、この辺りのはずだが・・・。」

きよろきよろと、あたりを見回す中將。雨水(うすい)の後ろで、ゆり前方の山際の塀に囲まれた大きな家を指さす。

「このあたりで、大きな家って、あれくらいしか、ないんじゃないですか？」

近くの村を通過した時に、訊いて来た。確かに、ここら辺りでは、あそこしかなさそうだ。日も暮れかかっているから、先を急いだ。

門を潜る。門といっても、国司の館のように、誰かが守っているわけでもなく、立派ではあったけれど、開けっ放しで、取次ぎもない。仕方なく、中へ入って、ちょうど、庭先を歩いてきた人を捕まえて、案内を乞う。

「あんた方誰だね？」

不審げな顔の、年配の男は、比較的こざっぱりした格好をしていた。胡散臭いものをみるような目で、無遠慮にこちらを見ている。別に、まとののに会わせてもらえれば、どうでもいいけどと、心の中でゆり。少し横柄な感じがする。首を傾げ、再度同じ質問を繰り返そうとする。それを、遮って、中將が首を横に振る。これこれ、こういう者から連絡が入っているはずだがと、この辺りで有力な豪族の名をあげた。すると、きゅうに、得心いったように頷き、笑顔になった男は。

「それなら、聞いております。京の偉い方の子弟が訪ねてこられるとか。大臣さまだったか、大

納言さまだったかのご親戚と、うかがってますが……。いや、一行は、同時に、二件だったかな……。」

大納言……。父上先回りして、手配をしてくれたんだと、ゆりは思う。中將が、大様に頷く。

「ふむ。連絡は行っていたか。右大臣どこの甥は、私だ。頭の中將である。こちらは、大納言さまのゆかりの、雨水(うすい)どのという。」

「ゆかりの……？」

首を傾げた男に、耳打ちする中將。

「身分は明かせぬが、大納言さまが懇意になさっている方だ。失礼のないようにな。」

「へ、へへ……。」

高貴な身分を想像して、こくこくと頷く男。中將は、次に、ゆりを示す。

「そして、我らが友の、ゆり君。まだ、童形だが、これでも、京ではちょっとした有名な陰陽師だぞ？侍女のまとのを心配して、ようすを見に来た。」

「へえ……ほう……。」

「早く、取り次いでくれ。」

「は、はい。」

男を促すと、慌てて中へ、駆けて行く。中から、今度は、小太りの中年男を伴って出てくる。その男が主人なのだろうか。やたら、満面の笑顔で出てきた男は、ゆりたちを中へ案内し、部屋へ通されると、歓待された。

目の前に、酒肴が並んでいる。

手をつける気になれず、いらいらしながら、ゆりは、酒盃を手に持ち、やたら愛想のいい女が酒を注いでくれるのを見つめている。

目の前には、この家の跡取りと称する男たちが座っている。先ほどの小太りの男もその一人だが、年齢は様々。まとのの大伯父だというこの家の主は、今、病の床にあり、彼には子がなく、従兄弟の子や、孫だのが集まっている。まとの本人が、いない。

で、こちら側。歓待を受けながら、ちらりと、ゆりは隣りに目をやる。

隣りは、中将。その向こうが雨水(うすい)。雨水(うすい)は、中将の先ほどの家人への耳打ちにより、一番上座に座らされている。

「ゆりどの、気になりますか？」

中将がゆりに、呟く。雨水(うすい)を示す。

酌をしてみわる女は、他にもいた。今、酒を注いだ女が、雨水(うすい)にさりげなく体を寄せて、座った。ゆりは、眉を寄せる。

隣りの中将のところにも、酌婦は回ってきて、べたべたしていくのだが、さすがに綺麗どころなんか見慣れているのか、全くアウトオブ眼中といった感じ。ま、そりゃそうか。内裏や、上級貴族の女房たちみたいな、一級品の美人を見慣れているんじゃ、目の前の彼女たちは、ただの田舎娘たちか……。ゆりは、自分の目の前で、流し目よろしく、こちらに笑みを送っている娘をみて、苦笑した。それにしても、桂無理やり重ねてるなあ……。京ぶりを意識したのか、とりあえず、一張羅をたくさん重ねてきたのか、着慣れていない印象だ。

う～ん。この、いかにも誘ってますって、サインはなんなの……。そう言うと、中将の口の端が笑う。

「おや。ばっちり、そのとおりです。今夜、忍び込まれないように気をつけて。」

「まさか……。」

「ゆりどの。結構、人気ありますよ。」

「いや、中将さまほどでも……って、あれ、また、さっきの女の人。雨水(うすい)に。」

「気になるんだろう？」

「いいえ。中将さまは、慣れてらっしゃいますね。ほとんど、まったく動じないといううか……あれ？」

雨水(うすい)も、困惑してないなああと、ゆり。

「彼も、だろう？……不遇だったとはいえ、美しい女たちは見慣れているだろうから。ゆりどの、眉間に皺寄せてどうしました？」

「……いや、別に。」

そのとき、雨水(うすい)と目が合った。ゆりの表情をみると、うんと頷いて、近くの人に、何事か囁いている。その人から、順番に、対面に並んで座っている、相続人たちの間で、囁きが広がっていき、あの、小太りの男が口を開いた。

「まとのさんは、今、こちらの家にはいらっしゃいません。近くの知り合いの尼さまの庵に移っていらっしゃいますから、明日には呼びに行かせましょう。もう、夜も遅いですし。今日はこちらで、お休みになって下さい。あの、まとのさんの主は、高名な陰陽師だとか。」

きたか。やっぱりと、ゆりは身構える。話は、物の怪を退治して欲しいと、続く。承知するか否かは、準備もありますからと、返事は引き延ばした。

ともかく、まとのにあってからだ。ここへ来てから何となく感じる、ここの人たちの感じの悪さが気になり、いつもと違い、ゆりは慎重な態度に出る。探るような視線を感じるのだ。

宴がお開きになり、各自、休む部屋へと引き取った。

真夜中。

ごそごそ……。むにゅ……。っ。

「う？むにゅ？」

うとうとしていたところ、自分のものでもない感触に、いっぺんに目が冴える。

がばっ。

「だ、誰っ？」

ゆりが、悲鳴に近い声をあげて、座ったまま一步さがる。

「あ、あなたは、確か、お酌をしてくれた人……。？」

「はい。こちらで共に休むようにと、申しつかってきました。」

うそ。中将さまの冗談じゃないんだから……。ゆりは、顔の前で、手を横に振る。

「ごめんなさい。そういうの、いいから。」

「は、……。あの。」

「えっと、破魔の法とか、精神力いるから……。一人で、集中したいので……。お断りします。それより、訊いていいかな？」

まとのが不在の理由を訊いてみた。ついでに、彼女とこの家の関係のことも。

「ああ。着いて、初日はこちらにお泊りでしたけれど……。まとのさんは、こちらの主とは、一番血縁関係が濃くて、仕方なく、最初、あの方が相続ということになったんです。」

「仕方なくって？」

まとのの祖父と、この主が兄弟だった。この主には子がなく、まとのの父が跡取りとなっていたのだが、折り合いが悪く。まとのの父は、妻をもらうと、そちらの方へ出て行ってしまったのだという。両親が亡くなり、まとのが一人ぼっちになってしまったとき、こちらでは、彼女の引取りを一度拒否している。まとのは、今、世話になっている庵の尼さまの紹介で、京の、彼女が最初に勤めていたお屋敷へ勤めることになったのだ。

むっと、への字に曲がるゆりの口。彼女の機嫌の悪さに気付かず、女は、しゃべる。

「それにしても、残念だわあ。こちらへ来る権利をめぐって、私たち、クジで盛り上がったのに。あっちは、候補者が、喧嘩して取っ組み合いで、あわやということになりましたけど。」

ゆりが、反射的に立ち上がる。

「ごめん。ちょっと用思い出した。」

ばたばたばた・・・と、外縁の廊下の角を曲がる。

「うわっ。」

人影に気付いて、止まろうとしたが勢い余って前につんのめる。

勢いよく床板に倒れるかと思ったが、差し出された腕がゆりを受け止める。雨水(うすい)だ。彼だとわかると、ゆりは一瞬状況が飲み込めず、目をぱちくりさせる。

「危ないですよ。」

「雨水(うすい)なんで、ここにいるの。」

「ゆり姫こそ・・・。」

「あっ。えっと・・・。」

雨水(うすい)の腕が放れる。ゆりは、床に座り込む。先ほど、女に寝所へ侵入されたことを話す。

「それで、私の所に？」

雨水(うすい)が、隣りに座っている。前のめりになって、話していたゆりの髪を一房、手ですくう。すると、黒髪が雨水(うすい)の手をすべり落ちる。

「いや。だから、困ってるんじゃないかって、思って・・・。考えてみれば、そんなことないわよね。酒宴の時だって、あんだけべたべたされても、さらっとながしてたもの。」

「少しは、気にして下さったんですね。」

雨水(うすい)の目が笑っている。ゆりは、返事を返せず、目をそらす。変だ。何だか間がもたないような、でも、そのままでもいいような・・・。けれど、ふっと、そこに現われたものに気をとられて、ゆりのその気持ちはひっこんだ。

「真白。」

うさぎの姿をしたゆりの式神が、宙に現われる。ぽすっと、床におりる。まとのの所へ、使いにやっていた。

「行ってきたのだ。まとのが、申し訳ないけれど、明日、こちらへおいで下さいって。」

「そうか。そうよね。まとの、ここに居たくないのよね。真白、お使い、ありがとう。えっと、部屋に戻って、とりおいてある菓子をあげるわ。」

「それ、ここのか？」

「ええ。田舎だからめずらしいものはないけれど、米を煎ってあるやつよ。小腹が空いた時用になって頼むの、恥ずかしかったんだから・・・。」

「いらないのだ。なんか、ここの米は、ねずみの糞臭い。」

「え～。」

会話を聞いていた雨水(うすい)が、袖の袂から出したものを、真白に渡す。

「これ、中将さまの別荘で、戴いたものだよ。道中、入用になったら、あげようと思って、持っていたんだ。量は少ないけど・・・。」

「おお。同じ米でも蜜がけだ。うまいっ。」

真白は、雨水(うすい)の渡した袋に入った煎り米をぱくぱく食べ始める。

「なんだかねえ……。あ、そうだわ。雨水(うすい)は、ずっと起きていたの？」

「ええ。少しこの屋敷を調べていたんです。中将さまと……。あ。」

くるりと振り返る雨水(うすい)。少し離れたところに、格子にもたれて、空を見上げている中将がいる。ゆっくりと、こちらを見て、にやりとする。

「いや。私のことは忘れてくれていいぞ。月を一人こうしてみあげているのも、一興。それなりに楽しんでいるから、君たちの邪魔はしないよ。」

同時に顔を赤らめるふたり。気を取り直した雨水(うすい)が。

「いえ。それよりも、この屋敷を見て回った感想を。」

「うん。しっかり貯め込んでるなあ。蔵がいくつもあった。国司も頭あがらないんじゃないか？私の感想は、それだけ。」

税は朝廷におさめられるために、その地方の民から集められる。だが、取立て方法は、地方によって違うだろう。国司の裁量なのだが、この国司。何年かごとに、入れ替わる。国司よりも、その地方の有力豪族などの子弟のほうが、当たり前だが事情に通じている。だから、国司たちも黙っているのだ。彼らは、規定の税を中央へ治めれば役目は果たしたことになり、余剰は自分の懐へ。そのために働いてくれる地方の有力者たちにはあまいのだ。目を盗んで、自分もうまいしるをすう人間もある。

「ええ。けれど、ここにいたるまでの、農民はそんなに豊かには見えなかったということは、かなりしぼり撮られてますね。ことの是非はともかく、そんなだから、財を貯めてある場所には良い感じはしない。気が滞っているというのか……。それにもまして、気になった場所がありました。」

ゆりの顔を見る。頷く、ゆり。

「うん。奥の棟の建物でしょ？たぶん、病人の寝ている棟だよな。」

こくりと、雨水(うすい)。ゆりが、溜息まじりに。

「まとのの為に、ここの魔法をといてやるかなあ。ちょっと、釈然としないけれど。」

「ええ。でも、それをしたら、そのあと、どうなるんでしょうか……。」

「う～ん。まとののが、ここ継ぐんだったら、まず、どうするか、あの子に聞いてみなきゃ。」

「そうですね。」

不思議そうな顔の中将に。

「中将さま。堰き止めていた水は、堰き止めていたものをどけると、どうなると思います？」

「水の流れか？……うむ。」

空の星を見上げる。皆、その夜は、そのまま、そこで静かに、星を眺めて過ごした。

朝まだき。適当に、起きている者に断ってその屋敷を出、まとののいる庵を訪ねる。

「ゆりさまあ！」

開口一番、まとののは、駆け寄るとゆりに抱きつき、えぐえぐと、泣いている。落ち着くと、昨晚のゆりの話を聞き。

「なんてこと！でも、ゆりさま、男の子で通っていてよかったあ。」

「え・・・？」

首をかしげたゆり。庵の持ち主、尼が、いつまでも立って話している彼らの中へ招き、落ち着くようにいう。ゆりのことをしげしげ見ている。

「まあ。女の方が、陰陽師なの？巫女ではなくて？・・・ああ、それではあなたが、まとののお仕えしている姫様。」

「まとのが、お世話になったそうですね。ありがとうございます。庵主さま。」

「いいえ。私も多少とはいえ、まとのさんとは薄い縁に繋がっていますのよ。でもねえ、このとおり、一人心細く暮らしている身では、養ってあげられなくて。それで、つてをたよって、幼い身に、お勤めをすすめたのですよ。」

尼の言葉に、まとのが大きく首を振る。

「この地にいるより、ずっといいですよ。死にかけの人には悪いですけど、あの人の近くにはいたくないですからね。それに、ゆりさまにも出会えたし、私、尼さまには感謝してるんですよ。」

「そう。それならば、安心ですけどねえ。」

尼は、胸のところに手をやって、顔をほころばせた。ふっと、顔を曇らせ。

「それにしても、まとのさんがあった難をきいてやって下さいよ。」

尼の言葉に、まとのがあちこち破れた袢を出してきて、見せる。

「これ、見てくださいよ～。ネズミに齧られちゃったんですっ。酷いでしょ？これ、お気に入りだったんですよ。」

確かに、無数の小さな齧られた痕がある。衣や、持ち物を齧られたり被害は、あの家の人なら、誰でも経験しているのだそうだ。

「ネズミ？何で、衣なんか・・・。もしかして、それで、頭にきてこっちへ来たの？」

「いいえ。一晚、部屋におきざりにしてありましたからね。荷物をまとめに、部屋に戻ったら、こんななってたんです。」

「置き去りって、どうして？」

「それが・・・。」

ゆりの問いに、答えたまとの。それを聞いて、ゆりは激怒した。

「どいつなの！無理やり、まとのを傷つけようとした奴は。蹴っ飛ばしてやる！」

「あ、ゆりさま。それは、私、自分でやりましたから。だてに、右京の市で鍛えられてませんから。押し倒される前に、たたきだしてやりました。」

「よしっ。」

ゆりが、まとのの手を握ってぶんと振る。あの屋敷の跡取りとされるまとのの婿の座を狙って、抜け駆けした者が忍び込んで来たのだ。叩きだしたあと、桔梗御前に付き添いにつけてもらった者のところへ転がり込んで、一晚、隠れていたのだ。次の日、早々に、この庵に駆け込んだ。

「……姫様らしくないけど、そんなゆりさま、素敵です。」

まとのの目の端に涙が浮かんでいる。それを指で、拭ってやるゆり。

「大変だったわね。まとの。もう、怪異を祓ってやる気なんか、失せてきたけれど、それも含めて、まとのが身の立つように考えなければね。」

「あ。いいえ。私、京へ戻って今までどおりに、お仕えしたいです。跡継ぎなんて、考えてません。そもそも、ここに来たのも、死に際に一言、父や母への謝りの言葉が聞けるかと思って来たんですから。」

「謝り？」

「ええ。ずいぶん嫌がらせもされてましたからね。亡くなったのは、やはり病ですけど、あまりの嫌がらせに、他所へ移ろうとしていた矢先だったんですよ。それで、少しは後悔してるなら、大っ嫌いだけど、水に流せるかなと……。」

まとのを探してまで呼びに来たのは、確かに、病人が呼んでいるからだと聞いて来た。

けれど、謝罪の言葉どころか、彼女がここについた時には、病人は意識もなく、話をすることも出来ない状態だった。

「そうなんだ……。じゃあ、ほっといて帰る？」

「いいえ。祓って下さい。それから、誰か他の人に、継いでもらいます。」

まとのの他にも、持ち物を齧られた、被害は出ている。ねずみと言ったが、目撃者の中に、灯火に映った、人よりも大きい影は、あきらかに鼠と言えるものではないそうだ。それから、犬や猫など、小動物の死骸が食い荒らされて、邸内に捨てられていた。もし、人にも被害が及んだらと思うと、それはそれで、良心が痛むらしい。

「……………」

ちらりと、雨水(うすい)と中将の方を見る。それまで、黙ってそばに座って聞いていたのだ。顔をく雨水(うすい)。

「他の人に継いでもらって、その場を誰に纏めてもらえばいいだろう。中将さま、何かいい知恵はありますか？」

「うん。まとの。そなたに、比較的良くしてくれた奴は、誰だ。いるか？」

「あ、はい。」

あの小太りの男だ。中将は、顔をく。尼に、その男がまとのの次に一番有力なのを確かめると、彼に白羽の矢を立てると言った。

そこそこ、世渡りが上手そうで、ものの分った人間のほうが、まとのにとっても、いいだろうと。世事に長けた者ならば、京の貴族に仕えるまとののを、後々、丁重に扱うはずだ。

「尼どの。この辺りで、あの家より、有力な家は？」

それを確かめると、その人物から口を利いてもらう為に、文をしたためる。尼のついで、使い

を頼み、彼が到着するのを待って、家敷へと向かう。

大したいざごぎもなく、小太りのその男が跡継ぎに決まり、彼から、まとののは、いたく感謝された。

下にも、おけぬ歓迎会が始まろうとしたところ、悲鳴が響き渡った。悲鳴の方へ、皆詰め掛ける。厩のほうだ。

「！」

この家の使用人が、恐怖にひきつった顔をして、先を指差している。厩につないだ馬が皆、暴れて、嘶く。その馬の一頭を黒い陰が狙っている。黒い陰は、ぶわんと大きく広がり、馬を飲み込もうとしたとき……！

がやがやと、駆けつける人の気配。「何だ。どうした？」「あ、あれ！」という声に、膨らんでいた黒い陰がしゅっと元の大きさに戻り、こそこそと逃げて行く。元のサイズに戻っても、馬の背ぐらいはある。

「ねずみ？」

ゆりと、雨水(うすい)が顔を見合わせる。

「後を追いましょう。」

二人が駆け出したあと、取り残されるのも怖かったのか、みんなぞろぞろついて来る。

影は、奥の棟の当主の部屋へ入っていく。続いて、皆も。入り口のところで、呆然と突っ立った人々。影は、大ねずみの形をしたまま、病人のそばの壁代におさまる。壁代の布に映って移動していくさまは、ちょん、ちょん、ちょん、とこそこそ足を動かすねずみそのものの動きで、いかにも病人の影のように収まった。

「あ～！もう、ばればれじゃない！」

ゆりが叫ぶと、影ねずみの顔がこちらを向く。一瞬左右に体を揺らし、いきなりこちらに飛来する。「わあっ！」と、頭をさげる人々。その上を飛んで、庭に逃げる。

「真白！」

ゆりが式神をよぶ。中空にあらわれるうさぎ。また、怪しいものの存在に、それが見えた人は固まったままだ。見えなかったこの家の人たちは、きょろきょろと周りの反応をみている。けれど、どこからともなく聞こえた声だけは、わかったようで、遅れて顔を青ざめさせる。

「ほいな」

「真白。あのねずみを追って、しばらく追い回してて頂戴。こっち結界の準備するから、終わったところに、あの病人が寝てる辺りに追い込んでちょうだい。いいこと、さっき生き物を取り込もうとしていたから、犠牲を出さないように気をつけて。」

「お安い御用なのだ。主、あとで上手いものな。」

「帰ったら、お腹いっぱい食べさせてあげるから。」

「あまづら、いっぱい～♪」

歌いながら、大ねずみの逃げた方向へ去っていく。

跡取りの小太りの男が、こちらを伺っている。突然、それまで身動きひとつしなかった病人ががたがた揺れだした。「ひっ。」と、悲鳴をあげながらも、意を決して口を開く。

「あの。どうするんですか？び、病人のところに追い込むなんて。」

ゆりは、水干の前の身頃のあわせ目から覗いている懐紙を抜き出しす。ふたつに折られた束を開くと真ん中に、金串のようなものが七本。先には白い紙のびらびらがついて、神主の使う幣の、小型のようなものだ。

臥せっている病人のまわりに、等間隔で床に突き刺して、立てていく。病人は、七角形に囲まれてしまった。

「今から、止まっているものをあるべき姿に戻してやります。」

「止まっている？当主どのは、どうなるのだ。」

質問に、ゆりは首を横に振る。

「お伺いします。本当に、祓ってもいいですか？」

「・・・・・・・・。」

「堰き止められた水はその場所で膨れ上がり、やがて堰を切って災いをもたらすでしょう。もう、もたなくなっているのです。祓わなかった場合・・・・・・・・。さっきご覧になられたでしょう？あの大ねずみは、生きたものを狙っていた。本当は、次の、この方に替わる人を探しているのです。あなた、あれを引き受ける覚悟はありますか？それとも、ここにいらっしゃる誰か、いらっしゃいますか？」

めっそうもない。ぶるぶると、首を振る一同。

「いや。どうぞ、ご存分に。祓って下され。」

青い顔して答える。ゆりが、頷く。

「来ます。皆、そちらの隅へ固まって。終わるまで、声を漏らさないで。」

ゆりが示した方向へ、慌てて移動する人たち。ちらりと雨水(うすい)に目線を走らせると、彼は軽く頷き、一番前列にさりげなく座る。雨水(うすい)は、袖の中で、こっそり印を結んでいる。示した場所にも、七角形とは別の、結界を印すものが置いてあり、行隠の術をかけた。同時に、飛び込んで来たもの。

天井付近で、大ねずみを追い回し、後ろから、鼻で突きまわすうさぎ。七角形の近くまでくると、どかっと、うさぎが蹴りをいれて、大ねずみを下に放りこむ。

「臨！兵・・・・・・・・。」

九字を唱えると、大ねずみはそこから出られなくなる。

ドン、ドン、ドン・・・・・・・・ツ。と、臥せっている当主が上下した。

ガタガタ・・・・・・・・ウオオオオ・・・・・・・・ツ！人の声とも、何とも言えない響きが辺りに木霊した。揺れる。ゆりが、印を汲みなおすと、その揺れは治まる。

「そこな大ねずみ！汝が本体は、どこぞ？思い出せ。」

ぴくっ。大ねずみがこちらを向く。

「大ねずみよ。お前は、実態に非ず。幻よ。人の欲望から生じた、汝は実態なきもの。実態なきもの影を得て、一人歩きしようとしているものよ。よく、聞け。」

ぴくっ。慄くようにのけぞる影。

「人と影、それは同時に存在するもの。人は影に非ず。影は人に非ず。けれども、二つに一つ、

どちらが欠けても、この世に存在することは出来ぬ。また、どちらか、一方が欠ければ、もう一方もなくなる。この世に、永遠なる命はなし。形あるものは、必ずいつか、終わりを迎える。わかるか？影のなき人はなく。人なき、影もなく。汝のあるべき場所は、この世にはない。」

影がぴたりととまる。ゆりは、もう一度九字を切りなおす。

「滅！」

結界の中の空気が、一瞬不自然なほど、凍結して見え、影が小さくなって消えていく。

短いけれど、静かな時間が過ぎ、ゆりが、緊張を解く。見ていた人たちの間から、自然と溜息がもれた。

「と、当主は、助からなかったのか……。」

と、訊いたのは、小太りの男。

「この方が、体調を損ねたのは、いつ頃ですか？」

「……完全に、床につかれたのは、三月ほどですが、それまでにも、しばしば、病に倒れたり
はされておりました。ざっと、三年ぐらい前には、さかのぼれるかと。それが？」

「おそらく、亡くなられたのは、三月前でしょうね。」

「え……じゃ、じゃあ、わしらが見ていたのは。」

「さっきの大ねずみ。本当はねずみではありませんが、当主の欲望が具現化したものです。ねずみだから、おそらく米。ここには、蔵がいっぱいありますね。失礼ですが、随分、人に恨みをかけて蓄財してらっしゃったのではありませんか？」

「う～む……。」

小太りの男は唸っている。まわりの、この家の人たちも互いに顔を見合わせている。

「欲だけが一人歩きしようなんて、有り得ない話のように思えるでしょうが、こんな結末を招いたようです。」

「あの、もう、あのねずみは……。」

「いません。ですが、気をつけてください。あなたも、あんなふうにならないように。蓄財というのは、時によけいなものも溜め込んでしまいやすいですから……。」

固まった小太りの男。男は、溜息をついてぼやいた。

「はあ。そんなこと言ったって、あれをすべて処分してしまうなんて……。」

男は嘆く。そばで今まで黙っていた雨水(うすい)が口を開く。

「水というのは、堰きとめすぎると決壊する。そうなる前に、少しずつ流してやればよいのでは？富があれば、当然人の羨望はあつまります。時々、施しでもしてやればいいのかもかもしれませんね。こちらの暮らし向きもありましようから、それを損なってまで、無理しろと、言われているわけではないのですよ。」

雨水(うすい)は、あくまで、公達の役割を演じている。扇を広げて、いかにも、京の貴公子のつぶやきのように、上品なしぐさで答えた。

男は、頷いた。と、そのとき、魔法がとけるように、当主の肉体がざっと、砂が解けるように無くなり、骨だけになった。

どこかで、轟と音がした。

「地震？」

建物は揺れていない。外だ。

チュウ、チュウ、チ、チ、チ……。見ると蔵の中から、ねずみがあふれ出ていく。チ、チ、チ……。それは、庭中いっぱいに溢れて、駆け回り、ひとしきり、あちこち駆け回ったあと、屋敷を出て行き、四散して行く。

そして、一匹もいなくなった。

翌日、新当主に見送られて、まとのを連れてゆりたちは出発した。

大量のネズミ達が逃げた蔵の中身は、以外にも、無事だったらしくて、当主は、ほっとしたようすで、ともかくも、礼をのべた。

帰りは、つつがなく、戻ってこれて、宇治で一泊。呼び出しがかかって、慌てて、帰った中將を除いて、ゆりと、雨水(うすい)、まとのは、ゆっくりと京中に入るまでの景色を楽しみながら、戻った。

道行く、すれ違う人もだんだん、京ぶりになっていく。それを見ながら、まとのが。

「結局、何しに行ったんだか。故人が、何故呼んだのか、分らずじまい。呼べと言ってるから、あの人たちも、私を探してたんだそうです。」

「いけ好かない奴でも、少しは、良心が残ってたって、思ってやったら？」

「もう、いいですけどね。そうでなければ、今、ゆりさまの側にいなかったですもん。」

まとのがほっと、溜息をつく。京の、なだらかな山並みを見ている。

「おかしなものですな。故郷とは言えないのに、こっちの方がああ、帰ってきたなんて思えるなんて。」

「そういうもの？」

「馴染めるところが、故郷なのかもしれないですね……。」

「うん。」

まとのと、ゆりの会話を聞いている雨水(うすい)は、いつものようににこにこしている。家まで、送ってくれて、そのまま、ゆりの母桔梗に報告をし、やって来ていた大納言も交えて、旅の話で、遅くまで談笑していた。

内裏の内。麗景殿へ、中將は向かう。妃の内の一、右大臣の姫で、中將にとっては、父方の従姉弟にあたる女御のところへお呼びがかかっているの、ご機嫌伺いに伺候する。

「中將が最近やつれたのは、どなたかに思いを寄せているからだとか、女房たちの間で噂になっていてよ。」

「は？」

何て間の抜けた返事だ。

実は、ここ数日のうちはずっと、お上直々に命じられた内緒の仕事があるのだが、その為顔を見せるのを怠っていた彼の行動が、呼びつけられて、内心ばれたかと思っていた中將は、従姉弟の女御から、開口一番訊かれたのがそれで、ほっとするとともに、それぐらいのことでいちいち呼びつけないでくれと、内心毒づいていた。

そばにいた腹心の女房が。

「中將さまの想いが叶わぬ方なんて、よほど、深窓の姫に違いないという話になっておりましたのよ。そうしたら、ちょうど、大納言さまの御子息の少將さまと最近親しくなさっているようだ、若い女房たちが噂をしていて、そう言えば、大納言さまには、年ごろの姫君がお有りになったということになって……。」

「大貳。もったいぶった言い方はお止め。それじゃ、何が言いたい、わからないわ。」

女御の声が遮り、几帳を隔てた向こうで、ずずっとこちらへ寄って来る気配がした。

「どこかで、噂を拾ったあなたの母上から、相手の親にお話を薦めてくれるようにと、私の父へ口添えをと、頼まれたの。恋やつれには違いまいから、いままでずっと身を固めないで、ふらふらしていたあなたを心配して、気が変わらないうちに話を進めて、外堀を埋めて逃げられないようになって、言うことなのよ。けれど、一応、確認はしておいたほうが、あなたの為にも、その姫君の為にもいいかと思って。」

中將の父は、亡くなっているの、代わりに、彼にとって、身内の伯父である右大臣に頼めば、事は容易に進められると、母は考えたのだろう。この女御は、深窓の姫にしては珍しく、何くれと身内を気に掛ける世話焼き気質で、相談を持ち込み易かったからだろうか、彼女から、そんな話を聞かされて、さすがに、中將も驚いた。

「大納言の姫に……？どうして、そういう話になってるんだか……。」

確かに、ついさっき、気まぐれに文を言付た。けれど、それは噂の根拠ではないらしい。中將は、困惑の表情を浮かべる。ままたま、直子姫のところへ遊びに来ていた姫に、文を送ってみただけ。姫の身元は、牛車についていた供の顔ぶれから、どこの家の娘だか、すぐにわかった。隠れて見た後ろ姿の、艶やかな美しい髪と、遠目から見ても凜と涼やかな様子、目鼻立ちも整っているのが垣間見えた。そういえば、あの、ゆりどのも、面差が似ていたっけ、深窓の姫君とは比べることもできないじゃじゃ馬ではあるけれど……などと、関係ないことを思い、ふるふると首を横に振る。あの時、すぐに立ち去ってしまったので、お近づきになる機会を逃したのだが、さすがに、深窓の姫を追い掛けるとなると、あとが大変なので

、それっきりになってしまっていた。

たまたま、忘れたい恋の為に、思い浮かんだのがかの姫というわけだ。兄の少将とは、それ以前から親しく話をする機会があり、どうやら、誤解が、的を射た結果になってしまったようだ。

とはいえ、親がかりの話となると、もう逃げられないので、回避を試みるべく、困惑の表情を浮かべ、中将は否定する。

「では、身分の低い相手との恋に悩むという噂のほうが本当なのかしらね……。ま、それはそれで置いていて、よいお話だと思ったのだけれど……。他の方ならそれでも、あるかもしれないけれど、さすがに、あの父の大納言からは良い返事はもらえないだろうから、このお話はなしということね。」

ほっとしながら、中将は、従兄妹の目をごまかす上手い言い訳を思いついた。

「このような心持で、縁談を進めるなど出来ぬことです。私とて、物の道理はわかっているのですよ。……。あきらめがつくまで、しばらくそっとしておいて欲しいのです。」

しおらしく頭を下げて頼む。うまい具合に、やつれた面差が傾くと陰りを帯びた。女房たちの間から、「お辛いよね……。」と、ため息が漏れる。御簾の向こうから、衣ずれの音がして、身じろぎする気配が伝わり。

「……。そうね……。私からも、あなたの母上に取り成してあげるわ。」

「ありがとうございます。」

すなおに礼を言い、御前を退出する。

これで、しばらくは、中将は、人目を忍んで会う仲の女がいるという噂が出来上がるわけだ。本当は、お上の頼みで、物の怪に怯える、里にいる梅坪の女御の為に、便宜を取り図るのだが、女御の立場が微妙なので、表立ってやってしまうと、後々、彼女に対する風当たりがきつくなるかもしれないので、内緒でということなのだ。

それだけで、別に、彼女だけ特別にお上の寵愛を得ているというわけではなかりょうに……。ちょっとしたことで、ぎすぎすしかねないから、主上の方が気を使ってるなんて、変な話だが、結果は、容易に想像がつくことなので、中将も敢えて身内でも言おうとはしなかったのだ。

今日は、何人か、心当たりのある協力者に声をかけ、その一人にと心づもりしていた少将がすでに、帰宅しているようだったので、自宅に押し掛け訪問を試みる。

大納言家の門を潜る時、琴の音と笛の音の、美しい調べが聞こえて来た。ここに住んでいるとは聞いていないが、もしかして、少将の妹姫が来ているのかな……。と期待しつつ、案内の者について、中へ入って行った。

中将が、大納言邸を訪れる少し前の時間……ゆりと、侍女のまとののは、連れだって、京中を移動していた。辺りを見回すと、道行く木々の枝には、もう葉が少なくなって、寂しい景色の中を歩いている。

「早いわよねえ。紅葉の盛りって、ちょっとなんだもの。」

「そうですねえ。京には、いなかったから、こちらの盛りの頃は見逃しちゃったですねえ。」

ゆりとまとののは、辺りのようすに目をやりながらゆっくりすすんでいる。

「ゆりさま。動きにくいですか？」

「え、うん。いつも、水干で走りまわっているんだもの。女姿の時は、建物の中で、あまり移動しない時だから……。」

「急に、無理なさらなくても……。」

「う～ん。でも、慣れないと、動きにくいままだから……。ほんと、実感だわ。」

重ね桂を、外出ように細帯で調節し、裾短く着ている。頭には、虫の垂れ衣といわれる薄い布の垂れている市女笠をかぶっていた。家の中では、姫姿でいる時もあるが、ほとんど水干を身につけていることが多いので、やはり気になる。

「これじゃあ、この間の田舎の女の人たちのこと、とやかく言えないなあ。」

「私の里のですか？」

「うん……。」

お酌をしてくれた彼女たちが、無理やり桂を重ねてるなあと思ったこと。考えてみたら、自分も着慣れていないように見えるのではないか。ゆりの感想に、まとののが、にこりとし、首を横に振る。

「大丈夫ですって。ああ、でも、歩きだったのだから、あまりいいものを着て来れなかったのだから、あちらへついたら、着替えましょうね。雨水(うすい)さま、向うにもお見えになるんですよね。」

「べ、別に普段どおりでも……。」

「いいから、任せて下さいよ。」

「……………」

と、会話をしながら、何気なく通りを歩いていた。前方の、竹垣で囲まれた大きくはない家敷から、泣き声が聞こえる。

「何かしら……。」

二人、顔を見合わせていると、門から、見知った顔が出てくる。薫風だ。顔見知りの陰陽師に、ゆりは声をかける。

薫風は、声をかけられて、一瞬目をすがめ、一拍おいてから返事をした。

「ゆりどのか。誰かと思った。」

「ああ。これ？」

ゆりが目の前に垂れている薄絹をちょっと跳ね上げて顔を覗かせる。薫風が頷く。薄絹を除けて、覗いた瞳は、相変わらず真っ直ぐに人を見つめていた。ゆりは、いつも童水干姿で出歩い

ている。男の子に見えるようにする為だが、たとえ袿を重ねても、ほんの少しでも、裕福な家の娘が、顔を晒さないように歩いているのなんか、気にもせず・・・と、思っていた。

「たまには、慣れておかないって思って。」

「・・・そうか。ここの家には、病人が出たので呼ばれて来たのだ。」

「病人？そう、駄目だったのね・・・。」

病でも、陰陽師が呼ばれる。呪いや妖の気配が原因の場合もあるが、彼らは、広く知識にも通じていて、有効な薬の情報も持っている。大体が、学問好きの多い連中なので、知識は無駄に広い。薬師は、呼ばなかったのかもしれない。

「いや。」

「それにしても、えらい沈みようね。」

「・・・・・・・・。」

まるで人が亡くなってしまったかのような中の気配。詮索するつもりはなかったのだが、ぽつりともらしたゆりの一言に、薫風はちらりと後ろを伺う。誰もまわりに、いないことを確かめて口を開く。

「ゆりどのは、傀儡子の知り合いはいるか？」

「傀儡子？ううん。必要なら、知り合いをあたってみようか？」

「いや、いないならいい。まだ、はっきりとは言えない。それに、傀儡子といったって、京に一人きりというわけでもないだろうからな。」

「ふうん？それと・・・。」

この家の娘が眠りから覚めないのだと、薫風は教えてくれた。

「必要な呪は施しておいた。もし、何か気になる事象が起きたら、教えてくれ。」

「って、何？」

「ゆりどのは、何も考えなくても、時々、いきなり核心を引き当てたりするからな。念の為。といっても、こちらも、手がかりがないわけじゃないんだ。」

「手伝わなくてもいいってことね。」

「ああ。子守をしながらだと、却って手間がかかる。」

「むっ。何ですって。相変わらずね。少しは言葉を選びなさいよう・・・。まったく。」

「何だ。思ったより、反発しないなあ。」

「これでも、先輩としては評価してるんだからね。変わり者だけど。それに、基本一人で対処するってのが、普通だから、動きにくいってのも理解できるから。」

「・・・・・・・・そうだな。」

突っ走りぎみだったのが、少し成長したかと、薫風は思った。そのまま、ゆりとは反対の方へ去っていった。

「ゆりさま。薫風さまって、格好良いですね〜。」

「どこが？まとの、いつぞや菓子を出してもらって、なついたか。」

「ひどいです。私は、真白じゃありません。・・・こう、落ち着いた感じが何とも。真意を明かさないうでさくさく、仕事こなしちゃってるって感じ。」

「・・・あれは、牽制じゃないの・・・。」

って、耳に入っていないな。まとののは、はしゃぎながら、薫風の去っていた方向を見ている。ゆりは、まとののを促した。あまり遅くなると、心配をかける。迎えをことわって、二人だけで、歩いてきたのだ。夕刻までに、父の屋敷へつかなければならない。ゆりたちも、その場を立ち去った。

庭の木はすっかり木の葉を落としていた。庭は、常緑樹のみが葉を繁らせていて、花もなく、そんなに間を空けていないのに、ちょっと見ない間に様変わりしていた。ゆりは、階の一番上のところに腰掛けて、柱にもたれて座っている。こちらにつくとすぐ、まとののが着せ付けてくれた衣装を着たまま、ぼんやりとしていた。

そばにいるのは、まとののみで、他の侍女たちは用がない限り下がっているのが常なので、ここには人目がない。ゆりの部屋のあるあたりは、庭も目隠しがしてあり、他の建物に訪ねてくる人があっても、うっかり見咎められることはないようにはしてある。

廊下を渡ってくる気配に、顔をあげる。

「兄上。」

兄の時貞だ。

「ゆり姫、久しぶり。珍しいなあ。女の子らしい格好してる。」

「うん。あ、やっぱり几帳面に、隠れてた方がいいかな。」

「そのままだでも、いいよと言いたいけれど、父上が来る前に、姿を隠そうな。雨水(うすい)どのも、構わないだろう？」

時貞が、一緒に連れてきた雨水(うすい)を振り返る。

「はい。」

雨水(うすい)が頷く。

それから、しばらく、話していた。久しぶりに、雨水(うすい)の笛を聞かせてもらい、ゆりも琴を弾いた。

そこへ、奥から紫野がやって来る。

「父上、お帰りになったの？」

「いいえ。まだ、お戻りではございません。お文が届きましたので、お届けに参ったのです。」

「文とは？」

時貞が、横合いから訊く。

「正親町の、ゆりさまのお友達の姫君からです。もちろん、兄君がご心配なさるような方からのものではございませんよ。」

ゆりの不思議そうな瞳に出会い、時貞は、軽く首を横に振る。

「ゆり姫も、本当なら、降るように恋文が来てても、おかしくないんだが。父上が、噂がたたないように、苦慮しているからな・・・。」

可愛がられてはいるが、家を継がない姫君。後ろ盾が、磐石ではないので、目端のきく若い貴

公子の関心が向かない。たまたま、ゆり本人が・・・という、場合もあるので、警戒はしてるらしい。

「姫って、単語だけで、憧れたりするものかしら？」

たまたま雨水(うすい)の方を見た。雨水(うすい)は、慌てて首を横に振る。そのようすを、時貞が見て笑う。実は、懐の中に持っているのだが、彼はそれを握りつぶすつもりなのだ。

「さあな。少なくとも、雨水(うすい)どのは、そうではないらしいな。ところで、お友達は、一体何を書き送って来たのかな？」

「あ、今、読んでもいいかしら。」

時貞と雨水(うすい)は、少し離れたところに座って話している。ゆりは、手紙を開き、読み始める。読みすすんで、ぱっと顔を輝かせる。読み終わって、文をたたみ、まとのに、紙を用意してくれるようにたのむ。

灯火を灯すような時間でもないので、文机を端に持ってきて、墨をする。筆を、さらさらっと走らせた後、雨水(うすい)を手招きする。

「えっと、安産祈願の符って、これでよかったっけ。」

「あ、それであってます。」

目の前に来た雨水(うすい)が頷く。時貞が、興味深々と言った顔で、近寄って見ている。

「早速、返事を書いて送ってあげなくちゃ。どのみち、高名な方に頼まれるのかもしれないけれど。」

「気持ちがかもっている方が、効きますよ。」

「ふうん、なるほど。ご懐妊ですか。」

そんなやり取りをされていて、うっかり庭先の気配に気付かなかった。まとのや紫野も、それぞれ立ち働いていて、注意を怠っていた。

「雨水(うすい)どの？・・・と、どうして、姫君が・・・。」

聞き覚えがある声だ。

皆、一瞬、固まってしまう。

「え？」

顔をあげようとしたゆりを、慌てて、近くの時貞が止めようとした。紫野がいち早く動いて、自分の体を盾にゆりを隠す。「まとの、早く。」「はい。」促されるまでもなく、まののが、簾をざっと下ろす。一瞬で、廊下と室内に区切りが出来る。一枚下ろしただけで、庭からの視線は避けられる。

けれども、遅かったようだ。顔をあげたゆりを見られている。それに、侍女のまのの姿は、何よりの証拠だ。

気まずい沈黙が流れる。・・・・・・・・。中將は、しばらく考えていた。

「・・・・・・・・そうか。やはり、最初に会った時に、会った気がするというのは勘違いじゃなかったのか・・・・・・・・。ゆりどの、直子(なおいこ)姫のところに遊びに来ていたな？」

直子(なおいこ)姫はあの時、気をきかせて中將が帰ったかどうか、確かめに行かせたはずだ。

「頭の中將どの。どうして、ここにお出でになるのですか。」

時貞が、少し詰問するような調子で問う。簾の向こうから身動きする気配が伝わって、ゆりが顔を出した。兄に首を横に振りながら。

「兄上。もうばれてるから、ごまかすのは無理よ。」

「……………」

するすると、裾を引いて中から出てきて、廂に座りなおす。明るい日差しの中で、ゆりの真っ直ぐな瞳が、中將を見ている。

「直子(なおいこ)姫は確か、人をやって、中將さまがお帰りになったのを確かめさせたはず。」

「うん。侍女たちは、そう思ったろうな。よく知っている家だ。隠れる場所くらい見当つくさ。車やどりのところで、車に乗り込む時、ちらっと見た。」

「それでは、次に会った時どうして、わからなかったのですか？」

「間近ではなかったし、ほんの一瞬だったから。それに、車についていた家人は、大納言家の者だった。はじめに、違う人と認識しているから、似ている程度にしか、思っていなかった。思い込みというのは、存外影響するな。」

「そうですか……………。ところで、どうしてこちらへ？」

「ああ。少將に頼みがあったのでな。ちゃんと案内を乞うて、東北へ通されたのだが、来た時に聞こえていた、管弦の音が気になって……………」

姫君は、ここの屋敷には住んでいないと聞いていたから、ここの家の女房たちかと思い、覗いてみることにしたのだ。

「いや。何となく思っていた疑問が、これで繋がったよ。」

雨水(うすい)と大納言の関係。院の御所に、捕縛に行った時係わっただけにしては、親身すぎるかと思っていた。

「ゆりどの。心配しなくても、他に吹聴してまわったりしないから。」

「頼みます。私はいいけれど、父や兄が、おかしな目でみられるのは心が痛みます。中將さま、どうかお願いします。」

ゆりは、頭を下げた。

「ああ。わかってるさ。…………私は、ゆりどのの人柄を知っているから、何とも思わないが、家族が奇異な目でみられるのは、やはり耐えられないだろうからね。」

ちらりと、そばの時貞を見て言う。中將の真意が伝わり、時貞が頷く。

「ところで、私に用とは？」

「あ、それなんだが……………。雨水(うすい)どのにも、頼もうか。それに、ゆりどの…………は、出られぬかな…………。」

中將は、ここに来た用向きを話した。ある、お屋敷を訪問してほしいという。

「梅壺の女御さまのお里…………。なぜ？右大臣家の姫の麗景殿さまではなく？」

「そこは、あえて突っ込むなよ。今、御所を退出なさって、お里にいらっしゃるのだが、相変わらず寂しい状態でな。先日、物の怪騒ぎがあったのだ。」

もちろん、陰陽師は呼ばれたが、何もなかった。中將が見たところ、女御のまわりには人少なく、心寂しい心理状態から出たものではないかと判断した。それで、宿直を頼みに来たのだ。

「大納言さまは、中立のお方だし、少将なら迷惑がらずに引き受けてくれるかと思ったんだ。他にも、何人か頼んである。二、三日の間だ。」

「構いませんが、頭の中將のあなたからということは……………」

時貞が、お上のご意思であるのかと問う。

「そうだな。だが、お一方だけ、特別に気かけられるということは、あとあと風当たりもきつくなる。内々に、というご意向だ。」

「なるほど、女御の父君の先の内大臣さまがすでに亡くなられてますしね。頼りになる男兄弟もいらっやいませんし……………」

このあたりの事情を繰り返したのは、雨水(うすい)に聞かせるためだ。後見の頼りない女御が、後宮で何事もなく過ごすつもりならば、ひたすら目立たなくしているほうが無難だ。しかし、難儀があっても、面倒を見てくれる人のない暮らしは、こういう時不便だ。

「梅壺さまは、口止めなさっていたのだが、伴っていかれた皇女さまから、御文が届いてな。お上も、心配なさっている。」

「なるほど。」

では、仕度を整えて、参りましょうかと、時貞が答えた。

夜の闇に囲まれた静かな邸内で、庭に明々と篝火が焚かれ明るく照らされた一画がある。室内は、ほんのりとした灯台の明かり。廂に、若い公達が座って、物語りしながら、たまに楽を奏でたり、御簾の内の女御さまの御前に集まっている。おつきの女房たちも、時々、気の利いた応えをしたり、楽しげな一時が流れた。

夜は過ぎ、彼らも、一時帰って行く。日は、もう上がっているの、ひとまずのんびりした気分、ゆりは、御前をさがろうとしていた。

「ゆり～。もう、寝ちゃうのか？」

立ちかけたゆりの袖を小さな手が引きとめる。

「姫宮さま。ゆりどのがお気に召したのね。」

そばにいた乳母が、ほのぼのと笑う。母の女御が、ほほ・・・と楽しげに笑い。周りにいた女房たちも、目を細めている。

あちゃあ、そうきたかと、苦笑するゆり。姫宮は、子どもだから、もちろん夜はぐっすりお眠りになっている。元気いっぱいだ。

「では、何をして、遊びましょうか。」

「雛遊び。」

「・・・・・・・・。」

まとのを連れてくれば、よかったわ・・・と、目の前に運ばれてきた雛人形を見て思う。

雛人形といっても、この時代は、節句に飾るようなものはまだ、なく、貴族の小さな女の子が、公達とお姫さまの人形で、ままごと遊びするものだ。部屋になる建物も、小さなお道具類なんかも、そろっていて、ドールハウスのようなもの。

「ゆりは、公達ね。あ、ちゃんと、お姫様に、お歌送らないと駄目だよ。」

「え～、姫宮さま、それは堪忍してください。私、こういうのであんまり遊んだことなくて・・・。」

「ゆりは、持ってないの？」

「ありました・・・けど、その。違うごっこ遊びをしていたというか・・・。」

普通の遊び方はしていなかった。呪いかけられたお姫様を救う、カッコいい陰陽師（自分）とかストーリーを作って遊んでいたような・・・。姫宮のうるうる期待に満ちた瞳に、負けて白状してしまった。

「そう言えば、ゆりは陰陽師だったっけ。それが、そなたの日常だったのだな。では、それでいいぞ。」

七つ、八つの幼い子どものくせに、大人びたものの言いかただ。ああ、恥ずかし。と、そう思いながらも、懇願に負けて、遊び始めた。

見ているお付きの者達も、女御も、くすくす笑っている。といっても、感じの悪いものではない。楽しそう。明るい空気が漂い、ゆりは、胸の中でほっとした。女御さまのまわりは、人少ない。最小限の女房しか置かないようだ。そのせいもあるのか、昨日ここへ伺った時には、静

か過ぎる、沈んだ空気に、ゆりは胸を痛めた。心理的状态から起きた物の怪騒ぎかもしれないといった中将の言葉も、的を射た言葉なのかもしれない。

今日は、皆、随分晴れやかな表情をしている。

ゆりの近くに座っていた女房が言った。

「うふふ。ゆりどの。あなた、物語でもお書きになったら。それ、そのまま、お話になりますよ。」

「そうですか？・・・じゃ、お仕事がこなくなったら考えます。」

「まあ。そんなことはないでしょう。あなた、あの桔梗さんの娘さんなんでしょ？力のある方だと聞いていますもの。」

「母をご存知なんですか。」

「ええ。私たち、女どもの間では、よく、ね。同じ女の方だから、気安く頼めることもあるもの・・・。」

「そうですか。」

手がとまっているので、姫宮が先を促す。続きをやりだして、話が終わってしまうと、はあっと、さすがに疲れが出た。

「疲れたのか？」

「ええ。ちょっと。」

「そうか・・・。もう一つ出してきて、人形を増やしてもっと見たいと、思っていたのだけれど・・・、また、今度だな。」

「あら、もうひとつ別のがあるんですか？」

「うん。この間、譲ってもらったんだが、あまり、好きではなくて遊んでないんだ。」

「好みではないんですか。」

「姫人形が本物っぽすぎるといふのかな、少し気味が悪い。でも、とっても、細工がよく出来ているから、あとで見せてあげる。」

姫宮の言葉に添えて、乳母が。

「今、その細工師は、引っ張りだこなのだそうですよ。でも、なかなか、連絡がつかないのだとか・・・。譲ってくれたというのも、せっかく手に入れたのに、姫宮と同じ理由で使われなかったそうで、行き場に困っていたからなのです。」

リアルな人形？

ふいに、思いついたことがあり、ゆりはそれを見せてくれと言った。

人形が運ばれて来た。姫人形の顔は・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

人形を手取るゆりの目が、瞬間見開かれ、涙が流れる。つつ・・・と頬を伝う涙を拭いもせず、ぼっと一点を見つめているゆりの、袖を姫宮が引っ張った。心配そうに見ている瞳に出会い、ゆりは、首を横にふると、無理に笑う。

ふらつきながら、必要な処置を施す。

「申し訳ありません。少し休ませて下さい。これは、それまで動かさないで・・・。」

後の言葉は続かなかった。

「ゆ、ゆりどの！」

ゆりは、床に崩れ落ちてしまった。

同じ頃。宮中。

朝から、中將は猛烈な勢いで、仕事を片付けていた。部下である蔵人たちに、指示をだし、自らも動く。決済を仰ぐ書類を持って行き、戻って来ると、一息つく。同僚の頭(とう)の弁が、書き物をしていた手をとめて、呆れ顔で見ている。頭の弁とは、二名いる蔵人の頭(とう)の一人で、蔵人どころの次官だ。長である責任者は、左大臣。実務にあたるのは、以下蔵人所の人員なので、彼らが纏めているのは確かだ。

頭(とう)の弁は、大弁(だいべん)をかねる文官、頭(とう)の中將は、武官だ。

「そんなに大変なら、物忌みで休めばよかったのに。あるいは、代参で、寺へ祈願に行くという手もあったな……。」

もちろん、代参は、お上から適当な名目を出してもらって、ということが前提だ。

「代参？却って目立ちまくりだろう。内々にだから、目立たない方がいい。」

「君、朝からしゃかりきに働いてて、目立ってるけど？」

「そっちは、とっとと仕事片付けて、どっか女のもとにでも行くんだろうぐらいに思われてるんじゃないか？」

「ああ。日ごろの行いが……ね。これも、人徳というべきか。うまいことに、この間まで恋やつれでげっそりとか、噂されてたからね。そういえば、もう吹っ切れたのかい？」

頭の弁がおかしそうにしている。

「恋は、ひとつじゃないからな。」

もともと、現実実のない出来事だった。

「おやおや。らしいといえば、らしいというか……。君のその主義をかえる運命の出会いがあったら、どうするのさ。」

「君もまた、夢物語のようなことを。」

仕事を円滑にするための、女官たちとの、恋愛遊戯。妻にと、望む女たちは、自分の後ろ盾に有利だとか、家の格だとかを重視して選ぶ、若い貴族たちがほとんどだ。そんな、中で、生きている者のセリフじゃない……と、鼻で笑う。

とはいえ、この同僚の頭の弁は、愛妻家なので、考え方は違うようだ。

「あ、そういえば、さっき、大納言さまのところへ行ってたけれど、書類を持っていったけにしては、ゆっくりだったね。何か、言われたのか？」

昨日、息子の少將に文を押し付けるようにしていたのを指摘された。見られていたとは、それも驚きだが……。中將はちょっと、探るような目で見て、頭の弁がたんに興味本位で言っていることを確かめると、手にしていた扇でぽんぽんと、自分の肩を叩く。

「小言を言われた。・・・言外に、娘にちょっかいだすなと言わんばかりだった。」

「そりゃあ、失恋直後だか、現在進行形だかわからんが、そんな奴から、文が届くのだもの。君、人柄を疑われるだろう、普通？あの大納言さまは、特に、その姫君の母君を大事にされているみたいだからね。妻には出来ない身分の女君のために、それなりの家から話があってもずっと断ってきたみたいじゃないか。」

妻は、一人と決まっただけではないので、他に通うことも出来る。が、現実には、同等に扱われるかというと、やはり、女君の実家の力に左右される。だから、他に通い所を持たなかったのだろうと、指摘する。

「・・・そうだな。」

それが、幸せなことなのかどうか、中将には、わからない。この頭の弁のように、ほどほどの懸想ならともかく、大納言のような身分の者が、たった一人と決めて、思う相手がいるのはどうなのかと・・・。お互いに、犠牲にしてきたのものもあるだろうし、紆余曲折葛藤はあったのだろうと想像する。生身の人間なのだ、きれいごとだけじゃない。

その時、中将の脳裏に、ふわりと浮かんだ姿がある。まるで、現(うつつ)のような夢。主義を変えてもいいかと思わなくもない相手に、巡り逢えたかもと、一度は思った。

けれど、あれは幻だ。その面影を振り払うように、首を振る。

頭の弁が、じっとこっちを見ている。

「いい話なんじゃないかと、思うけれど。まあ、本気でないなら、無理な相談だな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

うっかり心の中を見透かされたのかと思った。だが、頭の弁は、大納言家の姫君のことを言っているらしい。気付いて、中将は、肩を竦めた。

ゆりの姿を思い浮かべ、「そりゃ、無理だ」と呟く。あれはあれで、一つの花だが、かなり、変り種だ。あの子の事情を抱えてやるのは、自分には出来ない。先はわからないが、今のところは、恋愛の対象外にしておくほうが無難だ。

頭の弁が、書き物に戻り、筆を動かしたら、つぶやく。

「どうでもいいけど、落ち着いてくれると、助かる。この間の物忌み騒ぎみたいなのは、なくなるだろうからね。仕事が、増えちゃ、ますます、家に帰れなくなる・・・。」

「そりゃ、すまん。今日も、このあと、よろしくな。」

「・・・それは、わかってることだ。」

頭の弁が、筆を動かす方に、集中している。もう、話しかけても、ほとんど生返事だ。中将は、やるべきことはやってしまったので、退出するために立ち上がる。ゆっくりと、立ち去る。雨水(うすい)やゆりたちのいる、梅壺の女御の里へ、向かう。

闇が重い……。これは、夢？ゆりは、思う。暗い闇の中を歩いている。ここは、どこ？どこまでも、一人の寂しさが続いている。闇がずっしりと重く押し掛かってくるようだ。体の自由が利かない。なぜ……………。

自分を呼ぶ声に、ゆりは、ぱっちりと目を開けた。

「ゆり姫。」

心配そうな雨水(うすい)の顔が覗いている。ここは……。きよろきよろと、辺りを見回す。長局に几帳で仕切られた一番端に寝かされてる。女房たちの寝起きしている部屋だ。簾が下りていて外からは直接見えないようになってはいるけれど、庭はまだ日差しに照らされているのがわかる。

「私……もしかして、すごく眠ってたんじゃない……。」

「いいえ。倒れられて、そんなに時間は経っていません。もう少し、様子を見て目覚めないようなら、薫風どのを呼ぼうかと思っていたのです。」

「うん。どっちみち、知らせなくっちゃ……………。」

ゆりはそう言って、起き上がる。

「ゆり姫？」

ぎゅっと膝を抱えたゆり。雨水(うすい)を見つめている瞳に、ぽつりと涙のつぶが浮かぶ。手が、雨水(うすい)の狩衣の袖の端をぎゅっと掴んでいる。

「ごめん。ちょっとだけ待って。」

涙が止まらない。雨水(うすい)は、無言でゆりを引き寄せる。衣擦れの音が彼の腕の中に沈む。ゆりは、しばらく泣いていた。自分の背を撫でてくれる、優しい手に気づき、やがて、恥ずかしそうに離れて、ちょっと笑顔を見せる。

「よりまし体質じゃないから、油断してたわ。念(おも)いが……、哀しくて。魂が、あの人形につなぎとめられていたわ。もしかしたら、きのう、薫風が探していたものと同関係あるかもしれない。」

ゆりは、薫風に会った時の話をした。

「薫風どなの……………。それは、最近、流行っている眠り病のこと？」

「え？他にもあるの？」

眠り病……………。薫風が、眠りから覚めないと言っていたことは、本当なんだわと、知る。彼の依頼主の家の沈みようが、異様だったので、半分ぐらいにしか信じていなかった。意図するところがあれば、薫風が、本当のことを教えてくれない可能性もあると、ゆりは、思っていた。それならば、もっと詳しく訊いてみなければ、ならない。

「ええ。私は、依頼を受けたことはないのですが、薫風どなの他にも、似たような件に出会ったという方が……………。皆、若い女の人だそうです。」

「……………」

外の廊下の方から、咳払いの音がきこえた。女御のおつきの女房の一人だ。後ろに、中將を連れている。

「お気づきになりましたか？」

訊ねる声とともに、二人とも、入ってくる。

「こちらに、付いてみれば、ゆりどのが倒れたときいて、様子を見に来たんだが、お邪魔だったかな。」

中將のからっと明るく、からかうように、雨水(うすい)とゆりは、顔を見合わせて、くすっと笑う。雨水(うすい)が。

「中將さま。そういう気遣いは無用です。」

「ふうん？」

中將が、頷きながら、雨水(うすい)にだけ聞こえるように。

「向うの気持ちがこっち向いてるなら、さっさとものにしないと。あの親父どのから、認めてもらおうなんて考えてたら、駄目だぞ。」

「え・・・。」

「あれは、どんな奴が来ても、駄目ってタイプだな。」

にやっと、笑い、ゆりが不審な目で見ているのに対し。

「ゆりどの。やはり、怪異は、本物だったか？」

話題をあっさりと変更する。ゆりは、手短に今後どうするか説明した。そこへ、廊下を行ったり来たりしている人がいるのに、気づき、会話を中断する。やはり、女房の一人で、中へ声をかけたがっていたのだが、相談中のようなので、遠慮していたようなのだ。

「何です。無作法な。声をかけるなら、こちらに来てすぐかけなさいな。それじゃ、立ち聞きしているように見えますよ。」

叱ったのは、中にいた女房。彼女のほうが先輩なのだろうか。しおらしく、謝りながら入って来た女房は、中將を見ると、訴えた。

「あの。こんなこと、どなたに相談していいか、迷ったんです。思い違いなら、却って不安を呼びますし・・・。今朝なんですけれど・・・いいえ、ここのところ、よく。」

「どっちだ。」

「はい。朝のまだ、薄暗い時間なのではっきりと同じ人間だとは言えなくて、すみません。男が、庭をうろうろしているんです。」

「庭を？この女達のところへ忍んで来た者ではないのか。」

「いいえ。局の方じゃなくって、その・・・女御さまのご座所の近くで・・・一度なら、私も中將さまのおっしゃるように、誰かのところへ忍んで来て、迷ったのかと思いますけれど・・・。」

「一度や二度ではないのだな？」

「はい。女御さまのお側には、人が何人か、必ず詰めていますし、近寄ることはないのですが。昨日は、皆様集まってらしたから、そんな事はなくて、ほっとしてたんです。でも、お帰りになってしばらくしたら・・・。」

「やはり、来たのだな。」

「はい。垣根の辺りに身を潜めるようにして、進入する機会をうかがっているみたいで、慌てて、衛侍を呼んだら、逃げていきました。」

「では、衛侍に確かめてみよう。明るかったんなら、顔も見ているかもしれない。」

その女房には、皆といるように指示をして、もう一人の女房に、あの人形を置いてある部屋に、案内してもらおう。誰も近付かないように指示して、ゆりと雨水(うすい)、中將が残る。

中將が、人形を見て、驚いている。

「これは・・・。」

「こんなに人そっくりに作れるなんて、不思議ですよ。」

ゆりの言葉に、首を横に振り。

「夢の女にそっくりだ・・・。」

「え？それじゃ、閉じ込められているのは。」

「そうか、では、やはりどこかで存在しているのか・・・。は、はやく解放してあげてくれ。」

「中將さま・・・。」

中將のうれしそうな顔に、ゆりは戸惑いの目を向けた。雨水(うすい)が、何か考えている。

「ゆり姫。どちらにしろ、解放して、訊いてみないと、他の者が。」

「わかった。」

人形は、ゆりの描いた結界の線の中にある。丸い線のなかに、釘で、五角形の頂点を刺していき、御芒星を形づくる。印を結び、呪を唱える。

人形の輪郭が不自然にぼんやりとしたかと、思うと、元に戻り、その中空にぼんやりと人の姿が浮かぶ。美しい女が、立っていた。

女は、きょとんとしている。視線を巡らせて、中將と目があうと、にこりと笑う。

「あなたは、この間、私を慰めて下さった方。」

方違え先で出遭った女とは、この人形に封じ込められた女だったのか。ささいなことから、恋人と喧嘩して、そのまま、捨て置かれたままなのだと、泣いていたはず。中將が、訊ねる。

「ええ。そう、戻ってこないの、様子を見に行こうと出かけたの。・・・そこから、どうしたのだったかしら・・・。気がついたら、ここに、閉じ込められていたの。」

「誰も、私を見てくれないの、とか言っていた・・・。。。」

そうか、閉じ込められていたから、誰も見てくれなかった。気がつかなかったのか。しかし、何か変だ・・・と、思う中將。

「そう、あなただけが、見つけてくれたの。」

中將が、ゆりを見る。ゆるく首を横に振られ、彼は衝撃を受けた。

「中將さま。この方の現身は、もう・・・。」

「・・・わかった。」

少し俯いたあと、その女に近付く。手を取ろうとすると、彼の手は、虚しくその場所を通り過ぎてしまう。それでも、無理やり、あるはずのないその場所に、手を差し伸べて、止める。

「このまま、私以外の誰にも気付いてもらえないというのは、やはり、寂しい話だな。自由に、

なりたいかい？」

「ええ。」

「自由になっても、君は、この世に留まることが出来なくても？」

「この世に？・・・私、死んだの・・・。」

女の目が、大きく瞬き、次に、大きく見開かれる。静かに涙が溢れ出す。わが身に起こった出来事をすべて、思い出したのだ。

出かけた途中で、この人形を作った細工師に出会って、優しい声をかけられて、ついて行った。そこには、沢山の人形が・・・。怖くなって、その家を飛び出そうとしたところで、記憶は途切れている。最後に感じたのは、頭ががつんとした衝撃だ。「実験は成功した。かねがね生きているみたいな人形を作りたかったんだ。これで、作品は完成する。」とかいう言葉を聞いた。気付いた時は、この人形の中で、見知らぬ女の子の物になっていた。誰も、気付いてくれない孤独が続いた。

女は、自分の身に起こったことを、伝えた。

涙を拭う手の温もりを、頬に感じたような気がして、女は、不思議そうな顔をしている。中将だ。触れる事はできないはずの、頬に伝う涙を拭うしぐさをしている。

「不思議・・・感じるはずがないのに、暖かいわ。もしも、生まれ変わることが出来たら、今度は、あなたみたいな人を選ぶわ。」

女の顔が、ほのかに微笑んでいる。こくりと頷く。それを受けて、ゆりが、再び印を結ぶ。

「では、解放します。名前を伺っていいですか？」

「咲夜と、申します。」

「咲夜さん。影のなき、人はなく、現身のない影も、この世には存在しません。けれど、魂は、別です。肉体を離れても、存在することが出来るのです。行き場所は、自然とわかるはず。この世に、無理に留まろうとしないで、行くべきところがあるのだと、思っ。この人形を今から、破壊します。同時に、変化が起こるから、一瞬の変化を見逃さないで。」

ゆりが、呪を唱え始めると、人形に、ぴしりぴしりと輝が入って壊れていく。大きな亀裂が、入った時、するりと結界の外へ、女の姿が抜け出し、消える瞬間。

「ありがとう。」

中将のほうへ、手を差し伸べた。輝くような笑顔を残し、跡形もなく消える。宙を虚しく泳いだ中将の手。「空蝉の世にも似たるか・・・。咲いた花は幻の花だったか。」と呟き、彼女が消えたあたりをしばらく見つめていた。彼は、こちらを向くと。

「きれいな女ばかりが、狙われているのだったな。」

「もしかして、女御さまも、じゃないですか？」

中将の言葉に、答える雨水(うすい)。

「どうせなら、形代をかわりに、つかませて、後を追うというのはどうだろう。」

雨水(うすい)の提案に、うなずくゆり。

「それより、真白を変装させれば、確実だわ。出来れば、その前に、取り押さえないけれど、他の人形の行方を白状させなきゃ。」

と、真白を呼ぶと、ごねた。

「いやなのだ。女の格好なんて。俺様、強い鬼の王さまだ。」

ごねて、ぶうぶう言っているので、変装させても、さまにならない。困っている所へ、薫風がやって来た。彼の衣の肩に、桜の花びらがのっかっているのを見ると。

「もしかして、あの桜連れて来てるの？」

「ああ。」

「桜妖怪は、人の女に化けることは出来る？」

「もちろん。男を誑かして生気を吸い取ったところは、時々やってみたいだ。」

ゆりから、話を聞くと。

「それなら、こいつの方が適任だな。桜、攫われたあと、相手を誑かして、必要なことを聞き出せ。そのあとは、縛り付けておけ。」

にゅっと、室内に伸びてきた桜の枝が上下に頷いた。

怪しまれないように、準備を進めて、日没を待つ。その日も、若い公達が御前で、談笑したり、管弦など遊びをして過ごしたあと、朝、まだ、明るくならないうちに、帰って行く。同時に、女御の御前から、おつきの女房も退がって行く。その時に、まぎれて、本物と、桜の化けた女御が入れ替わる。御前には、怪しまれないように、女房に扮したゆりがついている。雨水(うすい)や、薫風、中将など、他にも、男手は、隠れて身を潜めている。

獲物が食いついてくるのを待った。

待っていると、庭の隅の方から、こちらに近付いてくる気配がある。ゆりは、偽者の顔が見にくいように、体の位置をずらす。似せてはいるが、執着がある相手なら、もしかしたら気付かれるかもしれない。

庭の隅の陰が、こちらへ飛び込んで来た。同時に、雨水(うすい)が入ってくる。

「ゆり姫。危ない、避けて。」

後ろを振り向くゆりの視界に、きらりと光る物が・・・！刃物？刃物が、ゆりの背につきたてられようとしている。駄目だと思ったとき、どんと音がして、雨水(うすい)が影をつきとばした。影が、顔をあげた。ぎろりと目ばかりが、浮き上がった、筋張った男だ。男は、なおも手に持っていた短刀をこちらに向けて、襲いかかろうとしている。

雨水(うすい)も、携えていた太刀を抜いた。軽く、短刀をはじき返して構える、雨水(うすい)の後ろに庇われながら、ゆりが彼の背にくっつくようにして、ささやく。

「雨水(うすい)。これじゃ、予定が・・・。」

「わかってます。」

何度か、刃を弾き返しながらか、太刀を振るって、切り捨てることはせず、体を少しずつづらして、男の目的のため、道を開けてやる。ふいに、女御のそばが、がら空きになったのを見た男は、恐怖に打ち臥していた彼女を袈ごと、ひつつかんで、庭へ飛ぶ。そのまま、急を叫んで、集まってきた男たちに追われながらも、それを振り切って、逃げて行った。もちろん、集まって来たのは、最初から、隠れていた男たちだ。本物の、女御は、今頃、内裏へ向かっている。

「やれやれ・・・。」

中將が、柱にもたれて、一息ついている。ゆりは、雨水(うすい)の袖がやぶれて、腕から血が出ているのをみると、自分の袖を破いて、持ち歩いている薬を塗り、手あてをした。

「ばか。避けられたのに。無茶しないで。前にも、あったけど、自分の命を粗末にしないで。」

「大丈夫ですよ。横から、当身しただけだから、刺されるようなことはない。」

「・・・助けてくれて、ありがとう。」

切り裂いた布を巻いている手を止めて、顔をうつむけて言う。それから、くるくると急いでくるみ、端をきゅっと結ぶ。

気を取り直して、薫風に問う。

「桜。上手くやってくれるかしら・・・。」

「ほどなく、戻って来るだろう。」

中將のところに、使いが来た。女御が無事、内裏に入ったというものだ。ともかくも、ひとつは、成功したようだ。

程なく、桜が戻って来た。

報を受けて、邪法を行った者として、検非違使が、捕縛に向かう。男は、捕らえられたが、牢の

中で尋問を待つこともなく、死んだ。

集められた人形をすべて壊したからだ。眠りの病に罹っていた者たちが目覚めた、その頃、邪法が返って、男は亡くなったのだった。

これで終わったのだろうか……。細工師という枠を超えて、邪法に取り付かれた者の最期の報を受け取って、ゆりと雨水は、居合わせた薫風に感想を漏らした。そこへ、中將が、ひとつの情報を持ってやって来た。

京には、打ち捨てられた屋敷が沢山ある。なんらかの理由で、次に住む人を得られなかった家は、朽ち果てるまま、草に埋もれかかって倒壊していく姿を晒している。

そんな、屋敷のひとつ。近隣の住宅もなくその一画は、まるで、野っ原のように見える。草が生い茂る中を道を探しながら、歩いている。ゆりと雨水(うすい)。それに、くっついてきた中将。ここへ来るまでの道々、好奇の目に晒されないように、当然、ゆりは、市女笠をかぶって薄いベールで、顔を隠していたし、雨水や中将たちも、被衣で、心持ち視線を避けるようにしている。ここに近づく一步手前の民家のところで、中将はここまで案内してきた従者を置いて来ている。おっかなびっくり案内してきた従者は、残れといわれて、心底ほっとした顔をした。

彼らの後ろから、ついてくるものがある。ごろごろ、車の轍を刻む音が聞こえる。

雨水(うすい)が振り返る。

「悪いけど、ついて来ても乗れないよ。」

立ち止まった三人の目に映った牛の曳いていない車が、残念そうにくにゃっと車体を歪ませる。雨水(うすい)が、家を出たあたりから、着いてきていたのだが、始めに乗車を断った為、こっそり付いて来た。人目のあるところでは、姿を消していたらしい。まるで、人のような配慮だ。中将の従者がいなくなったとたん、姿を見せた。

「拗ねても駄目。唐車なんて、私たちにはちょっとね。」

牛車にも種類がある。その中で、唐車は等級は高く、たとえ、物の怪でも、雨水(うすい)たちには、恐れ多い乗り物だ。ゆりが、近付いて行って、車の前に垂れている簾をそっと撫でた。

「どうやって治したのかしら……。以前に会った時は、直子(なおいこ)姫を助けようと思って、思いっきり引きちぎったけど……。」

会話が出来ないので、真白を呼んだ。

ぽよんと宙に現われたうさぎが、唐車の屋根に座っている。

「迷惑かけたから、銀の髪の鬼から、償いとして雨水(うすい)の役立つように、言いつかってるらしい。」

「そう言われてもなあ。他の目立たない車に化けるなんてことは出来ないの？」

唐車が、ぷるぷるんと車体を揺らす。真白が、面倒臭そうに。

「こいつは、この姿に誇りを持っているのだ。でも、主が所望なら、知り合いの車をあたってみると言っている。」

他にも、こんな奴がいるのか……と、三人。

「勝手に主にしないで下さい。もしかして、乗り込んでも姿を消すことは出来るんですか？」

「わっ。」

唐車が上下に跳ねたので、真白が落っこちた。真白が通訳するまでもなく、出来ると言っているのだ。真白は、用が済んだとばかりに、姿を消そうとしているところを、ゆりに捕まる。

「真白。あんたは、これから、お仕事。例の影を隠れ家から出しておいて、あとは置いといていから……。あとで、お餅ね。」

「ラジャー！三日夜の餅というのを食べたいのだ。」

「何？あんた、奥さんもらうの？」

三日夜の餅というのは、結婚の儀式のひとつ。婿が花嫁の所へ、三夜続けて通い、その三夜めに、新婚の二人が食べる餅のことだ。

「まとのが何か話していたのだ。あ、そうだ。俺様からも、主を促してくれ～とかなんとか・・・。」

「で、何もらったの？」

「干し柿。田舎から、送ってきたとか、上手かったぞ。鼠臭はなかったしな。」

「買収されてんじゃないの。ごほん。それは、私が何とかできる問題じゃありません。早く、影を追って。唐菓子、特別に、蜂蜜がけよ。」

「やった！蜂蜜～♪行ってくるのだ。」

うさぎが、意気揚々と宙を駆けていく。ゆりは、ばつが悪そうに、ごほんと咳をして、雨水(うすい)たちを促す。雨水(うすい)は、唐車に。

「私たちが、影を狩っている間に、中將さまの身を守っていてくれるかい？」

返事かわりに、するすると御簾が巻き上がる。影の住処の庭に差し掛かったところで、中將がおっかなびっくり、中に乗り込む。

「食われてしまうなんてこと、ないよな？」

「大丈夫です。随分、忠実な車のようにだから。そこで、待っててください。」

「あ、ああ。見物しているよ。」

中將が引きつった顔で、笑っている。一緒に、被衣と、市女笠を預けて、彼を残して、雨水(うすい)とゆりは、築地の三分の一の高さくらいが残った塀を越えて、中へ。

中も草が生え放題。芒(すすき)が生い茂っている。白い月が出ていて、月と芒、こんな時でなかったら、それはそれで、風情を眺めたかもしれない。

「影がまだ、残っているのだったわね。今は、まだ、犠牲者が出ないけれど・・・。」

「ええ。結界をつくります。本当に、おとりやるんですか？桂を貸してもらって、私がやってもいいんですよ。頭から曳き被ってれば、わかりませんから。」

「ううん。薫風から、頼まれてるから。前に、私がやった七角形の、教えられたとおり、出来るよね？」

「はい。」

「まあ、私じゃ、女御さまみたいな美女じゃないから、食いついてくるかわからないけれど、影だけなら、判断力は落ちてるはずだから。じゃあね。」

雨水(うすい)に手を振り、ゆりは、一人、野原に佇む。銀色に輝く芒の野原に、月に照らし出される女・・・。雨水(うすい)は、その姿に一瞬気をとられて見つめるが、すぐに、作業にかかる。ゆり姫を危険な目にあわせたくない。真白に、隠れ家から追い出された奴が、うろうろしているはずだ。杭のようなもので、地面に七角形を描く。ゆりに、合図を送って、雨水(うすい)自身は、隠(おん)行(ぎょう)の術をかけて、姿を消す。

月のように白い面の、女が佇む。やがて、住処を追い出されて、そのあたりをうろうろしてい

る黒い影が、忍び寄る。黒い影は、嘴のようなものがついていて。

風もないのに、袷の袖が揺れる。かかった。ゆりが思った瞬間、風がこちらに向かってくる。尖った嘴がむかってくるのを、ゆりは、するりと身をかわす。何度も、繰り返し、向かってくる風を、するりするりと身をかわし、雨水(うすい)のつくった結界の脇に移動した。ゆりの耳に、雨水(うすい)が呪を唱えはじめたのが、聞こえる。

「馬鹿な奴。同じ手にひっかかるなんて。どういうつもりで、人を殺めていたのかしら。」

突然、言葉を発した女に、影は、一瞬動きを止めた。

おそらく、始めの犠牲者が咲夜。実験という言葉は、咲夜が聞いたと言っていた。実験だから、命を落としてしまった。あるいは、眠っていると、亡くなっているを勘違いされて、葬られてしまったか。他は、何らかの方法で接触後、魂を人形に写し取っただけだった。だから、眠り病。目覚めても、家族のもとへ。ただ、怖い夢を見たとしか……。

「まだ、咲夜さんの孤独の感覚がはっきりと残ってるわ。」

影は、ゆりの言葉を解さず、また、動き出す。……過ぎた欲望が勝ったとき、判断力を失い、獲物を攫うように変化してしまったのか。もし、女御が攫われていたら、その後はどうなっていたことか。わからない。すべては、推測でしかなく、今、ゆりの目の前には、現身を無くし、影だけが、不自然な形に変化して彷徨っている。

ざああ……っ！向かってくる風を、するりとかわす。

嘴のついた影は、結界の中に入り込む。

「……影なき人はなく、人なき影もこの世にない。永遠ならざるもの命、お前の本体はもうない。あるべき場所へ。滅せよ！」

影にとってはどこからともなく響く声に囚われ、「滅。」と、雨水(うすい)が最後の呪を唱えると、瞬間、七角形の網にかかった影は、輝きとともに、姿を消した。

ゆりは、月を見上げて、立っていた。結界に使っていた道具を、雨水(うすい)が拾って、その隣りに行くと、彼女はにこっと笑う。

「もしかして、また、泣いてるかと思った？」

そう言ったのは、近寄ってきた雨水(うすい)が案じるような目をしていたから。

ゆりは、首を横に振り。

「こういう仕事してると、やりきれない思いを抱えてしまうこともあるわよ。感傷的になっても引きずらないの。動けなくなってしまうから。それに、代わってあげることもできないし、一緒に不幸になることも出来ないでしょ？私は、私で生きてるもの。自分のこと幸せにしてあげなくちゃ、それは変わらない法則、でしょ？」

「係わることは、出来ても、なりかわることは出来ませんしね。一緒に不幸になったって、それも自己満足かなあ……。まあ、笑顔にはしてあげられませんしね。」

「うん。でも、何かしら、手は貸してあげられるよ。係わることで、私も、色んな事に気付かされることもあるし。……咲夜さんの、味わった孤独ね、私、自分が恵まれてるんだって思ったの。気にかけてくれる人に囲まれて暮らしていて。雨水(うすい)も、そばにいてくれるし。」

「……………」

「だから、私は、私の出来ることをやり続けるの。雨水(うすい)は？このまま、陰陽師なんか、やってもいいの？お上に願い出れば、源姓を賜って、臣籍に下り、ふつうの公達のように世の中を渡って行くことも、出来るんじゃないの？」

「それは、不合格ってことですか？」

「え？ああ、それね。薫風には、合格って、伝えとくわ。大変、よく出来ました。」

ほっと、肩から力を抜いた雨水(うすい)。ゆりはくすくすと笑う。

「薫風から、意思を確かめといてくれって、今は、まだ、学生だけど、自分の係累として、本当に引きずり込んでもいいのか……。自分で、訊けばいいのにね。」

雨水(うすい)が、軽く頷く。

「そうですね。ゆり姫といたってというのは、本当ですが、それには、別の方法もありますからね。でも、陰陽師を選んだのは、それだけじゃありません。始めは、父の起こしたことに對して贖罪や、今後の対策にも適当じゃないかと思ったからでした。でも、今は、違う。」

「違うの？」

「色んなことを、学べるのが楽しくて。それに、ゆり姫と、同じ理由、自分に出来ることをやる。学ぶことも、こうして、この仕事に係わることも、苦じゃないです。」

「そっか……。じゃあ、それも、伝えとくね。」

ゆりは、辺りを見回した。軽く、眉を寄せる。瘴気が、まだ、残っているのだ。雨水(うすい)は、狩衣の袷から、笛を取り出し、ゆりに笑みを向けた。

「少し、笛を吹きましょうか？」

こくりとゆりが、頷くと、雨水(うすい)が笛を奏でる。月に照らし出された、芒の野原に、白銀の輝きが灯っていく。中将の待っている場所へと、移動しながら、ゆりは、雨水(うすい)の姿を見つめる。これだけは、叶わない。雨水(うすい)の笛は、辺りを浄化していく。ゆりは、薫風が言っていたことを思い出す。魔を祓うことは出来ても、場を浄化させることなんて、自分たちには出来ない。確かに、楽の音の陽の気を満たして、いい方向へ向かう手助けをするので、結果として、場が浄化することはあるのだが、鬼の陰の気を帯びているはずの雨水の笛の音は、この法則がなりたたないはずなのに……。今、ゆりの耳に聞こえる笛の音は、きらきらと輝いている。鬼の瘴気にも影響されず、人として真っ直ぐに自分を保つことが出来た雨水(うすい)だから、可能なことなのかもしれないと。笛は、真白の鬼の力の欠片だ。真白も、同じようなことを言っていた。ただし、何か先例があることではないので、この先どうなるかわからない。薫風は、真白の持ち主は、ゆりだから、出来ることなら力をかけてやれとも、言っていた。どういう形で、係わっていくことになるのかは、わからない。ただ、雨水(うすい)のそばにいることは、ゆりにも、居心地がいいことは、確かだ。

唐車のところへつくと、雨水(うすい)は。

「姿を消して、皆を近くまで送ってくれる？」

唐車が頷く。中将は、

「ああ。従者を待たせているから、私はすぐそこまでいいよ。」

そう言って、本当に、従者の待っている附近で降りた。

「いや。物の怪でも、唐車なんて乗る機会は、ないだろうから、いい経験をした。じゃあ、また、今後とも。よろしく。」

手を軽く振って、従者の待つ場所へ立ち去っていく。雨水(うすい)は、唐車に。

「ごめん。ちょっとだけ寄り道してくれるかな？あの、銀の髪の鬼の住処の近くで、しばらく立ち止まって、欲しいんだ。」

「どうするの？」

「笛を、遠くからでも、聴いてもらおうと思ってる。」

唐車が、返事代わりに、簾を上下に巻いたり、下ろしたりする。

「ありがとう。」

雨水(うすい)とゆりは、物の怪唐車に揺られて、移動する。途中とまった場所で、雨水(うすい)は、心を込めて笛を吹いた。心の傷を癒してくれるように、その人に、届いたのかどうかわからないけれど、一曲弾き終わると、寂しそうに薄く微笑して、笛をしまう。待っていたように、唐車が、動き出す。

第三章 七

右京の家へ送ってもらって、雨水(うすい)と別れて、ゆりが自分の部屋へ戻ろうとすると、母の部屋の方から、灯りが漏れている。待っててくれたのかしらと、外から声をかけて、中へはいる。

「父上。来てらしたんですね。」

母のそばに、寛ぐ父の姿を見つけて、ゆりは側に座る。

「何だ。」

やたら、にこにこしている娘の姿に、いぶかしげな顔で答える。

「父上。中将さまから、聞きました。女御さまのそばへ伺ったときのこと。私のことを案じて、頼むといていたと。随分、脅しに近いものだったとか。」

「ふん。あの夜呼ばれた若い奴の中には、随分やんちゃな奴も入っていたんだぞ。妙な虫がついて、ゆりが泣くようなことになったら、大変だ。あのくらい、当然だ。」

「ええ。別に、大納言家の姫だということを隠すつもりはないと、言って下さったとも。そういえば、兄上も、同じことを。私に不利になるようなら、隠し立てすることはないと。結構な剣幕だったと、中将さまが、笑いながら、おっしゃってました。」

ゆりが、こくりと頭を下げる。

「ありがとうございます。沢山、愛情をもらって育ててもらって・・・でも、やはり、この仕事をやめるつもりはありません。私も、自分の領分で、誰かに貸してあげられる力を・・・自分にできることをやりたいの。わがままを言って、すみません。」

「なんだ。そんなことか・・・うん、そのことなんだが。」

頷く大納言は、にやりと笑って、首を縦にふる。

「ゆり、良い事を思いついた。父に任せておけ。」

「・・・あの？」

「いいから、いいから。明日な。疲れただろう、今日はもう休みなさい。」

後ろで、桔梗があきれた声を出す。

「あなたには、負けました。・・・でも、娘ばなれして下さらないと、ゆりに婿が通ってくる事が出来ませんから、目を光らせるのも、大概になさいますせ。」

「そんなこと、わかっとる・・・。」

「どうかしら？ふふ・・・。」

桔梗が、ゆりに笑みを向けて、「お休みなさい。」と言う。ゆりは、訳がわからぬまま、部屋に戻り、眠りについた。

「え～！何で、解決方法が引越しなの～！それに、今日って、何それっ？」

と、翌朝、ゆりが叫んでから、もう随分日にちが経ち・・・。

何かと忙しい年の暮れ、正月と過ぎて行き、二月の明日は立春というある日。

庭の梅の木を眺めている。今年は、やけに暖かくって、随分早く、梅の花の蕾が、目立ち始めている。

ゆりが顔をあげる。裾を引く衣擦れの音が聞こえ、まとのが、折敷に載せた菓子を運んでくる。それを、階のところにぼてんと座っているうさぎ、式神の真白の前に置く。

「うまい。うまい。ここの家では、姿を現したままでも気にしなくていいのだ。」

「そうですね。誰がみても、驚かないし。免疫のない人は、アポなしで、訪ねて来ませんから。」

まとののは、柱に寄りかかったまま、庭を見ているゆりの姿に目を細めた。

表が白で、裏が蘇芳色という紫がかった赤。

うっすらと、薄紅色に下の色が浮き上がって、もうすぐ、この庭に咲くだろう紅梅の花のような色合いの袷を身につけていた。

模様も花びらを模した形が一面に散らばっていて、床に広がった下の衣の色の重なりも美しい。はあ。満足。まとののは、一人、悦に浸っている。

彼女のリアルお雛様計画は、進みつつあると。

横目に、ちらりと写ったまとののようすに、何を考えているか、見当がついたので、ゆりは心の中で、ため息をついた。まあ、このくらいの欲なら、かわいいものかと思い、ほって置くことにした。

ゆりの目と合い、まとのが、ふふと笑った。

「今日は、さすがに顔を見せて下さいませんよね。文でも、送って下されば、いいのに。」

「鬼やらいじゃ、忙しくて来ないわよ。」

もちろん、大晦日のではない。立春の前夜にも、追儼・・・鬼やらいが行われる。雨水は、その為の準備に借り出されているはずだ。

「あ～あ。せっかく、姫様生活も、同時に楽しめるのに。ゆりさまったら、冷めてますね。」

「そう？」

「そうです。大納言さまが、せっかく考えて下さったのに。」

「そうね。まさか、引っ越すなんて思わなかったわ。」

左京の、少し不便なところに、隣り合った二軒の家がある。一軒は、ゆりが今寛いでいる大納言家の別邸。

隣り合ったもう一軒が、桔梗御前という女の陰陽師の住む家。もちろん、あちらも、ゆりにとっては家である。西隣の庭を伝って、外へ出ずに行き来できる。

「よく、こんな場所をすぐ見つけてくれましたね。」

まとののは、今の生活が気に入っていて、うきうきしていたので、ずっと失念していたことに、今、気付いたらしい。

「もともと、ここは、父上の持ち物よ。時々、方違えとかに使ってたし。隠居した時用に、手入れを欠かさずに、とってあったのですって。それで、たまたま、隣りが売りにでていたので、手に入れる気になって、母上を説得したんだって。父上は、仲介ってかたちで、母上名義で購入しなきゃ、ならないから、了解がないとできないでしょ？」

「でも、結局、お方さま、ご自分で購入なさったのですね。」

「家、別に生活に困ってたわけじゃないわよ？母上の拾ってくる物の怪たちのせいで、化け物屋敷っていわれて、人がいつかなかっただけなもの。」

「そうですか？慣れば、別になんともないのに。害があるわけなし。でも、人が来てくれてよかったですね。こっちも、関係者だし、ゆりさまも、あんまり姫様を意識しなくてもいいし。」

「それだけは大助かりね。」

それでも、二軒分には、人が少ない。普段は、こっちに詰めているのは、最小限なのだ。「それにしても、あの、化け物屋敷といわれた我が家を、買った人がいるなんて、すごいわ。」
「そうですね。どんな人かしら・・・。」

そんな話をしていると、奥から少し慌てた足取りがして、紫野がやって来た。彼女は、志願して、本邸から、こちらへやって来たのだ。まとのを含めて、不慣れな、新米女房たちを教育出来るのは、自分しかいないと、やりがいを感じて、ばっちり貫禄を見せている彼女には、珍しい。

「申し訳ありません。来客が、今、庭先へ来られるはずです。ゆりさま。几帳の向こうへ、早くお入り下さい。」

「雨水(うすい)じゃないの？」

「はい。中将さまですから、一応。」

ゆりが、几帳の向こうに、納まるった頃。庭先に、中将が現われた。

「へえ。なかなか、別邸と聞いてたけれど、心遣いの行き届いた屋敷じゃないか。」

廊下の隅に、活けられた花を見ている。

「おや。ここでは、姫君かな。気安く声をきかせてはくれないのかな？」

まとのが、口を開こうとしているのを、ちらりと視線で制す。

「雨水(うすい)どの達、陰陽寮の人間が、今日は忙しくてさすがに駄目だ。仕事、頼めるかい？」

几帳の奥から、くすくすと笑う声がもれる。ゆりが、顔を覗かせて。

「あのう。そういうことなら、今度から、隣の屋敷に来てくださいね。今は、取次ぎも、しっかりしていて、そんなに、待たせることはありませんから。」

「そうか。いや、すまない。とりあえずは、文を運んできた春告げ鳥に免じて、赦してくれ。」

梅の枝に、結びつけた文をゆりに渡す。ぱっと顔を輝かせて、受け取りながら、それを大事にしまってから。

「ご自身で、いらっしゃったってことは、余程、急いでいるのですね。お話、うかがいましょう。」

ゆりが、まっすぐに顔をあげて、言った。

大納言邸の別邸の隣りに、得体の知れない屋敷がある。

知る人ぞ知る、新しい心霊スポットが誕生した。

そこに、住む人があるというのは、初め皆が不思議がる場所だが、陰陽師の自宅と聞いて、納得するのだ。そうして、隣の別邸に住む、姫君と母君も、女所帯に、ある意味、安心でしょうと人は、言う。実は、どちらも、同じ人のものと知らずに。

「年ごとに人はやらへど目にみえぬ 心の鬼はゆく方もなし」

毎年、毎年、鬼に扮した人が鬼を祓うけれど、目に見えない心の鬼ばかりはどうしようもない・・・と。

賀茂保憲女は、詠っているけれど、悩みや、欲のない人なんていない。それが、大きく育って、心のバランスを崩してしまったとしたら。

人の心が、鬼を作り出してしまうのでしょうか・・・。そんな一つが、ゆりの元に持ち込まれて、今日も、出かけて行きます。

おわり

※作中の漢詩、

霜草は、蒼蒼として、虫、切切。

村南、村北、行人絶ゆ。

独り門前を出でて、野田を望めば、

月明らかにして、蕎麦(きょうばく)、花、雪の如し。

は、白楽天の詩から。

※作品の後半、咲夜が消える場面で、中將が呟いていたのは。

「うつせみの世にもにたるか花ざくら さくと見しまに かつ ちりにけり」

という、古今集にある よみ人しらずの歌です。このお話が、桜が咲く季節じゃないので、さわりの部分だけにしました。

やらへども鬼 2

<http://p.booklog.jp/book/40603>

著者：みん兎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokinoizumi3/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40603>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/40603>

